

おじいさん・おばあさんが若かったころ

摂津市域 昔の暮らし

昔から摂津市域で暮らしてこられた60歳代から80歳代の方々に、平成8年から9年にかけて「昔の暮らしの様子」を聞かせていただいたお話をまとめました。(延べ53人)



目 次

《全体的な地域の特徴》 ～予備知識として～	1
(以下、聞き取りのまとめ)	2
《日常の生活と地域の様子》	2
一年間の生活の流れと年中行事	2
子どもの遊び	1 1
大人の遊び	1 1
子どものお手伝い	1 2
おやつ	1 2
遠足	1 2
学校と先生	1 2
じゃこ取り	1 3
鴨獲り	1 3
結婚式	1 3
葬式	1 4
ご馳走	1 4
力石	1 5
買い物と行商	1 5
病気と医者	1 6
服装と履物	1 6
燃料と暖房	1 6
生活用水	1 6
風呂	1 6
ゴミ	1 7
かまど	1 7
お膳	1 7
屋号	1 7
伊勢音頭	1 7
作業歌	1 7
奉公	1 7
夜の暗さ	1 8
静かさ	1 8
鳥飼の渡し	1 8
蒸気船	1 8
淀川、堤防、中州	1 8
河川改修	1 9
水路の整備	1 9

土地のかさ上げ	19
浪曲、猿回し、にわか	19
お参り、講	20
戦中戦後の生活	21
昔の子どもの遊び歌	21
《米作りを中心とした農業》	
きびしい農作業	22
米作り作業の1年間	22
肥汲み	26
《地場産業》	27
メリヤス、ウド、鳥飼ナス、ムシロ、縄、柳コウリ、苺、ケシ、綿、シジミ、川砂	
《郷土を襲った大きな災害》	29
見天切れ、大塚切れ、室戸台風、第2次世界大戦、水不足、洪水、集中豪雨	
《村の組織と機能》	31
ジゲ（地下）、カイチ（垣内）、同行頭（ドウギョウカシラ）、青年団、処女会、 愛国婦人会、在郷軍人会、翼賛壮年団、消防団、水防団、自治会、カブ（株）	
《「聞き取り」で得られた摂津市域の方言》	- 32
《伝えておきたい印象的な話》	35
《郷土のおはなし》	37
サムライの話、狐の話、狸の話、蛇の話	
《郷土を守り発展させる》	41
（聞き取りを終えて）	42

この冊子は、平成8年から9年にかけて、子ども時代から摂津市域で暮らしてこられた60歳代、70歳代、80歳代の方々から[昔の暮らしの様子]を中心に聞かせていただいた「聞き取り」のまとめです。数人ずつ19回、延べ53人の方に話していただきました。

《全体的な地域の特徴》

～予備知識として～

- ・現在の摂津市は、もともと安威川以北の旧三宅村と旧味舌村、安威川以南の旧鳥飼村と旧味生村から成り立っており、各村はそれぞれ異なる地域の特徴を持っていた。
- ・もとは、全体として純然たる農村地帯であった。近年になってから急激に都市化した。
- ・農業にとって重要な意味をもつ「土地」と「水」の条件は、安威川以北と以南で大きく異なっていた。
- ・低湿地が多く、利水だけでなく排水のためにも長大な水路を必要とする関係で、水利組合が重要な役割を果たしてきた。

安威川以北の千里丘丘陵末端およびそれに続く扇状地では非常に早く(縄文期または弥生期)から生活の場となり、農業などの開発も早期から行われていたと考えられる。

水不足に悩まされることが多く、その対策として多くの溜め池や農業用の井戸が掘られていた。ただし、南部の大正川、山田川下流域は低湿地で、ドタ(泥田)と洪水に苦しんだ。近年、国鉄(JR)千里丘駅、新京阪(阪急)正雀駅、産業道路ができたことにより急速に都市化していった。

安威川以南の淀川と安威川に挟まれた地域は、淀川に沿ってできた自然堤防の上だけが小高い場所であり、この部分から土地利用が始まったと考えられる。

自然堤防や淀川中洲以外の土地は全て低湿地で、排水が農業の中心課題であった。

淀川とその支川および安威川の洪水に悩まされ、いったん洪水になると排水が困難なため、1～2か月も水に浸かることが多かった。

淀川およびその堤防が物資と人と文化を運ぶ大動脈であった関係で、もともと淀川に面した地域が摂津市域の表玄関であった。

注～古くから船着き場や旅館、料理屋があった。摂津市域で最初の郵便取扱所(郵便局)が置かれた。メリヤス工場、今のカネカやダイキンなど近代工場が早期に進出した。

ごく近年まで、例えば買い物に行く場合、三宅地区は茨木へ、味舌地区は吹田へ、味生地区は、川向の河内や大阪市内へ、鳥飼地区は茨木や河内、大阪市内へ行くというように交流する方向が異なっており、お互いの交流はむしろ少なかった。

(以下、聞き取りのまとめ)

《日常の生活と地域の様子》

1 年間の生活の流れと年中行事

正月

- ・元日は学校で式があり(昭和 30 年代中頃まで)、「年の初めに」という歌を歌った。紅白のまんじゅうをもらった。
- ・元日の朝、各家の代表者みんなが、お寺かお宮か集会所などに集まり、新年の挨拶をした。代者の挨拶の後、コップ酒でスルメをかじったりしながら、お互いに挨拶をしたり、昨年の農作業を振り返って話し合ったりした。だから、年始回りはしないですんだ。
- ・子どもや若者は吹田や茨木、天六へよく映画を見に行った。
- ・遠くの初詣では、八幡の八幡宮が多かった。その近くにある橋本遊郭などに寄る若者たちもいた。

「大晦日はたいてい麦飯とイワシと年越しのソバかうどんを食べます。晩は子どもも大人もヨーネンというて遅くまで起きて、カルタや百人一首で遊んだり酒を飲んだりします。除夜の鐘が鳴ると、雑煮でお祝いして、お宮さんにお参りします。それから家に帰って、ご先祖さんにお参りします。」《鳥飼中》

七草カゴ

- ・1月7日は、七草カゴを食べた。ただし、七草でなく水菜やナズナだけのカゴを食べたところが多いようだ。鏡餅を切ってカゴに入れたところもある。

とんど

- ・小正月である1月15日の朝かその前日、葉の付いたままの長い竹を円錐形に組んで中にワラを入れ、シメナワや根付きの松などの正月飾りを焼く「とんど」をしたところが多い。
- ・書き初めを焼いて空高く昇ったら、習字が上手になるといわれた。鏡餅を割って、棒に刺して、焼いて食べたりもした。(近年は捨てるように焼いて、食べない人が多くなった。)
- ・残り火や竹のカラケシを持ち帰って、その火でアズキガゴや雑煮を炊いたところが多い。
- ・カラケシを魔除けにしたり(鳥飼、別府)、灰を田に撒いて虫が発生しないことを願った(味舌)ところもある。
- ・鳥飼の各村をはじめ多くの村では子ども(高等小学生)の自治的行事。他の地域では若中(ワカナカ青年団)主催の行事という傾向が見られる。(近年はお宮さんや学校がやっている。)
- ・「ドンド焼き」「左義長(さぎちょう)」などとして全国的に見られた行事。

「高等科2年(今の中2)の子で作っている親友会が取り仕切る行事でした。前の晩からスキヤキをして泊りがけで番をしました。《市場》

「とんどの火を提灯に移して大事に持って帰って、それで赤いオカイサン(あずきがゆ)を炊いてもらいました。固くなった正月の鏡餅を割って水に浸けておいて、それもオカイサンに入れ

て食べました。」《鶴野》

「1月15日は大人のとんどで、6日は子どものとんどです。ワラを貰いにいくところから全部子どもだけでやりました。」《味舌》《竹の鼻》

初午(はつうま)

・ごく一部のみ行われたようだ。

「さんの家は稲荷を祭っておられました。初午になると、子どもたちがその家に呼ばれて、赤い幟を持って、『正一位稲荷大明神、稲荷さんのことならどこまでも、あ、よいよい』と言いながら家の周りを回りました。後で赤飯をくれはりました。」《中内》

寒(カン)の餅

- ・1年でいちばん寒い寒(カン)に餅をつくると、カビが生えないといわれた。
- ・大量について、ほとんどアラレやカキモチにし、保存して、1年中のオヤツにする。

年越し(節分)

- ・豆撒きをして年の数だけ豆を食べた。
- ・塩イワシと大麦の入ったご飯を食べたところが多い。
- ・年越し飴といって紅白のねじり飴を売りにきた。

「うちでは今でも年越しと大晦日に家中で麦ご飯を食べています。年の変わり目に贅沢をいましめるためです。」《鶴野》

「若い娘さんがオバケ(大きな桃割れ髪を特徴とする和装)を結ったりしました。」《中内》

3月3日のひな祭り、5月5日の端午の節句

- ・一般的でなく、金持ちだけの行事だったという。
- ・旧暦で祝った。
- ・ひな祭りは「ひな段」を飾り、端午の節句はヨモギやショウブを屋根の上に上げて、後で風呂に入れた。

味噌作り

・2月か3月頃、どこの家でも自家用の味噌を作った。

「まず蒸した屑米に麹を混ぜて、コタツに入れて発酵させます。それを炊いておいた豆と合わせて、壺に入れて保存します。6月頃から食べられますが、土用を越すとおいしくなります。」《鳥飼中》

花祭り、ようか日

- ・4月8日は釈迦の誕生日。子どもがお寺や神社(神仏混交の名残りか)にお供えを持って行き、甘茶(アマズラという植物を炊いたお茶)をもらった所もある。

「五銭か十銭持って金剛院へ行くと、茶瓶に甘茶を杓で入れてくれました。」《竹の鼻》

山行き

・4月18日(遠い昔は15日だったらしい)、学校の授業は2時間くらいで、午後から弁当や酒を持ってジネンジ山(吹田の日生団地や毎日放送のある山。似禅寺という寺があるのでジゼンジ山が正しいと思われる。)へ出かける。桜やツツジが咲いていることが多く、お花見かピクニックといった非常に楽しい行事。戦後も、日本生命が山を買い取って団地を建てるまで続いた。

・安威川以北の行事、山から遠い鶴野では安威川へ「山行き」した。

・八町でもずっと昔は、安威川の土手で「山行き」したらしい。

・民俗学によると、「山入り」「花見」などとも呼ばれ、全国的に行われた。もともとは田仕事を始める前に予祝として、田の神(田仕事を始めるまでは、山におられる)と食事を共にする行事だったといわれる。だから、全国的には日はさまざまであり、また花見も桜とは限らない。

「途中の道はレンゲがいっぱい咲いていました。ジネン寺というお寺があって、そのお寺の上の山でゆで卵や夏みかんを食べたり、ワラビやツツジを採ったりしました。」《中内》

「山行きの時、子どもたちの村対抗のケンカがよくおこりました。石を投げ合ったりして。でも、理由はよく分からないのです。」《太中》

「今でも4月18日は山行きをします。でも、バスに乗ってホテルへ行く山行きです。農地会の総会をします。」《味舌》

村芝居

・春の農閑期を中心に、あちらこちらで村芝居が行われた。プロが自ら興行するもの、村や青年団がプロを呼んで行うもの。青年会の素人芝居などいろいろであった。

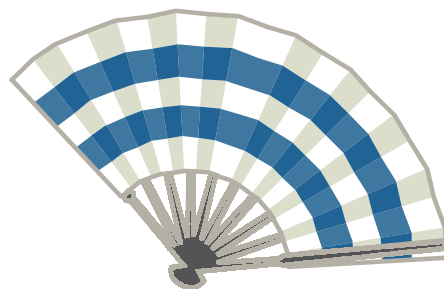
・たいていは、架設のむしろがけやテントで幟を立て、出しものを触れ歩いた。

・終戦後しばらくは、プロでなく、青年会(戦後は処女会も合流していた)が演芸会をしたところが多い。

「田植えが済んで、蛙が鳴いているころ、触れ太鼓がチョンマゲを結うて回ってくると嬉しおました。」《味生》

正雀川の向こうに「三友座」という芝居の常設館がありました。入り口で関東煮を炊いて売っていました。」《市場》

「村の有志が役者を呼んできてやる花芝居というのもありました。ちんどん屋が触れ回って、芝居は晩にやりました。」《竹の鼻》



伊勢神楽

- ・麦秋と米秋(収穫期)の年に2回、伊勢から大神楽(獅子舞、太太ダイダイ神楽ともいう)がやってきて各家を回った。たいていは7, 8人で来る。
- ・普通村ごとに1泊していた。どこの村に行けばどこの家に泊まるかは、昔から決まっていた。
- ・千里丘駅の開設、味舌小学校校舎の建て替え、味舌天満宮の正遷宮(ショウセングウ、本殿の修理などが完成して、ご神体を戻す儀式)といった、めでたい時にも呼んだ。金持ちが呼んで、近隣の人たちに見せることもあった。こうした場合は特別公演として、見応えのある「演技」が披露された。
- ・普通の場合は簡単な獅子舞や獅子が子どもの頭を咬む(咬まれると丈夫に育つといわれた)といったもの。特別公演ではサーカスや道化的内容が多かった。
- ・火伏せ(火事除け)の意味もある。カマドの前でも舞い、そこに貼るお札をくれた。
- ・渡す「お礼」の多さによって「演技」の内容が変わった。そこから、「伊勢神楽のようなやつ」という言いぐさがあった。

「今でも4月と秋祭りの時に、旧家だけは回ってきます。」《鳥飼》

田植え

- ・苗代作りは4月末から5月の初め頃にした。
- ・田植えは、梅雨に入りかける6月初旬から中旬にした。
- ・田植えをする日は村ごとにおおよそ決まっており、必要に応じて苗を譲り合ったり、手助けをしたりした。
- ・人手を借りての集団作業は少なく、原則は「自分の田を自分で植える」こと。
- ・目印にヒモを張る。腰をかがめてのつらい仕事だった。
- ・深い泥田は水中にウネを作って植える。田舟に苗を積んで溝の部分を引きなので、前進みの植え方になる。
- ・子どもは子守りや弁当運びなどのお手伝いをした。そのため学校は一定期間休みになった。
- ・処女会(女性の青年会)は臨時の保育所的なことをしたりした。
- ・学校から、子どもを苗代に連れていき、「苗の虫取り」といって、害虫の卵の付いた苗を抜き取らせた。

「田植え前になったら、河踊りといって、淀川本流の水を実正樋(ジッショウヒ又はサネマサヒ)まで導く路を掘りました。これが1年たったらまた埋まってしまうのです。」《鳥飼上》

さなぶり

- ・田植え後の骨休めの日。総代さん(部落長、区長)や実行組合長(農協の前身の代表者)などが日を決めて、村中に知らせる。思い思いに休む。
- ・ボタモチをこしらえたところが多い。

草取り、ヒノツリ

- ・雑草が生えないように、道具でかき取ったり、手で田の土をならしたりという作業を、暑い時分に数回くり返す。
- ・腰をかがめ太陽とヒルに攻められる非常につらい作業。したがって、昼食後しばらくはヒノツリ(昼寝)となる。1時か2時にお寺の鐘がなって、「ヒノツリ果てた」とまた暗くなるまで田に出る。
- ・草取り頃の7月1日を「半夏生(ハンゲショウ)」と呼んで、半日休みにしたところもある。

「半夏生には生のタコを食べました。」《別府》

七夕

- ・七夕に行事をした話は少ない。

「うちの子どもが小さい時分には、七夕の笹を作って、山田川に流しました。」《中内》

雨乞い

- ・雨の降らない「日焼け」が続くと、田んぼや川の水が干上がる場所があった。そこで昔は降雨を祈る雨乞いが行われた。味舌では、大正から昭和の初め頃に続いた日焼けの時の雨乞いが詳しく伝えられている。

田の虫送り

- ・稲の害虫であるニカメイチュウの発生する夏(8月初め頃)に「田の虫送り」をしたところもある。
- ・鳥飼では、全村が日と時間を合わせて、各家ひとつのタイマツに火をつけ、幾組かに分かれて、並んで自分たちの村(大字)の田んぼを回った。
- ・先頭の人がかねを叩き、並んで歩く松明の姿は、遠くの村からも見聞きできて、すばらしい夏の風物詩だったという。
- ・ウンカが発生したときは、田の水に石油をたらし(古くは鯨油)、その水を稲の株の根もとあたりにかけた。

「タイマツは6月初めに収穫する菜種のカラを使いました。」《鳥飼中下》

「竹にそこらにある木を突っ込んで、ぼろ布を巻いて灯油をしみ込ませる。1時間ほど持つように作ります。」《鳥飼八町》

夏祭り

- ・秋祭りに比べて地味だった。

お盆

- ・摂津市は浄土真宗の家が多く、お盆の行事は他地域と比べて地味、とりたててしない所が多い。
- ・鳥飼野々では「ソンジョサン(ご先祖さん)迎え」というお盆の行事を大事に執り行う。
- ・お盆はヤブイリ(若嫁さんや奉公人が実家へ帰る)の時でもある。
- ・墓参りはやはりお盆やお彼岸が多いようだが、それ以外に参る人もけっこういる。

「本願寺やからホットケサンといいまして、砂糖菓子と盆のソウメンを飾るぐらいです。盆のボタモチは作ってもらいました。」《中内》

野外映画会

- ・学校の運動場などに、白い布を立てスクリーンにして映画会があった。スクリーンの表と裏の両側から見られた。
- ・ニュース映画が先に上映されたり、物売りの宣伝があったりして、それから本番の映画になった。昔は無声映画で、目玉の松ちゃん(尾上松之助)などが人気だった。

「映画会はよそからも娘がきました。着物を着て、お化粧して、ウチワ持って。若い衆がからかったりお尻をさわったりしました。」《乙辻》

盆踊り

- ・江州音頭(ゴウシュウオンド)が中心。一部では河内音頭や権六(ゴンロク)踊りも。終戦後は炭坑節なども。
- ・江州音頭の音頭取りとして、砂川千丸(新在家出身、砂川捨丸の兄)が有名だった。捨丸も兄について回っていた。
- ・みんなユカタがけ。戦前は提灯のほのかな明かりの中で踊る。徹夜で踊ったところもある。
- ・男女交際の絶好のチャンスだった。ただし、このことに関しては否定する人もけっこうあった。
- ・遠くまで踊りに出かける人もあり、よその村から大勢くるところは大きな踊りの輪ができる。
- ・盆踊りをしない地域もあったが、そこでも好きな人はよそへ踊りに出かけた。

「めったにない世間公認の男女交流の場やから女の子は見違えるほど飾ってきました。親にしても良い人が見つければという気持ちもあったと思います。恋愛なんていやらしいものと言われていた時代でも、色々なことがありました。」《味生》

「江州音頭の盆踊りは、この村から出て、高槻の唐崎や北の新地など色々な所へ出かけて行きました。」《別府》

「江州音頭は盆踊りだけのものでなく、個人が自分の家に呼んで、近所の親しい人と一緒に聞くということもありました。」《鶴野》 「座敷で聴くのは座敷音頭というて、物語に節を付けたようなものです。」《鳥飼下》

地蔵盆

- ・たいてい子どものための行事、お供え物があがり、子どもや各家庭に配られた。
- ・鳥飼野々や鳥飼下は大人中心の行事だったらしい。

「うちでは5、6年生を中心とした子どもが主催しました。まず掃除して、お金を集めに回って、岸辺のマルカツでお下がりを買って、食べて、残ったものをくれた金高に応じて配って歩きます。6時頃になると提灯に火を入れて「とんどのお陰で、百の米一斗五升」(百粒の米が一斗五升になる)と唱えながら村を回ります。」《竹の鼻》

「この辺は一軒一軒に地蔵さんを持っている家がたくさんあります。」《太中》

「うちの村では、青年団の芝居がお地蔵さんのご馳走でした。男ばかりだから女役もありました。たいへん有名で、よその村からも大勢の人が見にやってきました。昭和の初めにはもうやっていました。《八町》

ダンゴ突き

- ・お月見には、各家でお月さんの見える所にススキ、お団子、ツチイモ(ドロ芋、小芋)などを供える。
- ・男の子は、そっと忍び寄って、このお団子を長い竿で突いて取るのが楽しい行事だった。
- ・ダンゴ突きでなく「芋突き」のところもあった。ここでは主としてツチ芋を供えた。

「ダンゴは米を石臼で粉にして、水で練って、蒸して作ります。」《中内》

秋祭り

- ・秋祭りは露店も出て盛大に行われる。露店は夜になるとアセチレンの明かりを灯す。
- ・親戚も集まり、カシワがつぶされるので、堤防などは鶏の羽根だらけになった。
- ・学校の授業も少しだけだった。戦前戦中は学校から集団でお参りした。
- ・昔は提灯や幟を担いでねり込む「宮入り」が盛んだったらしいが、現在では藤森神社以外はあまりやらない。道路事情のせいだという。
- ・ねり込み(宮入り)は提灯や幟を先頭に、カネや太鼓を叩き、伊勢音頭を唄いながら歩く。酒が入っているのでケンカやもめごとが多かった。
- ・ねり込みの時の伊勢音頭は、近年はずいぶん崩れてエッチなものになっているが、以前は真面目なものだったという。
- ・神輿(ミコシ)や太鼓の担ぎ手少なくなり、簡略化しているところが多い。

「小学校を卒業すると、男の子は青年団に入ります。祭りのときは、この入りたての子が、酒とスルメの持ち役をさせられるんです。酒は五升ぐらい。1升びんラッパ飲みで歩くので、たいていよその村とケンカになります。それもたいてい道中の決まった場所でおこるのです。大人の役持ちのくせにイテマイナハレとケンカをけしかける人もいました。」《鳥飼上》

「昔は宵宮の晩に宮入りをしました。集まるまでにさんざん飲んでくる。いざ宮入りとなると、伊勢音頭を唄って幟を振りたおす。それでたいてい電線が切れて、東では停電になりました。《味舌》

「味生神社のねり込みは、伊勢音頭ではなく声聞(ショウモン)を唄います。ねり込みの順番の

最後の垣内（カイチ）が鳥居をくぐったところで声聞を唄うとき見物人も多くなり、最高に盛り上がります。」《味生》

「井於神社の祭は、昔は神輿があったのに、八丁池の水と交換するために、山田村に渡してしまったという話を聞いています。」《太中》

「昔は、10月13日に太鼓が出て、乗っている子の家を回りました。14日の晩は宮入りとか宮出しです。15日はオネリ（行列）です。先頭は天狗さん、それから神主と巫女（ミコ）さんが人力車で続きます。それから刀かなんかのお道具、子どもの乗った太鼓、最後がお神輿さん、こんな立派なオネリでした。」《中内》

運動会

- ・学校の運動会は、大人たちの楽しみでもあった。朝からゴザなどで場所取りをした。
- ・午前は学校の子どもの運動会、午後からは地域の大人の運動会となったところが多い（踊り、綱引き、リレー、相撲、銃剣術など）。旧村の青年団（青年会）対抗で争ったりして熱が入った。

・戦後しばらくは青年会の仮装行列が人気だったようだ。

「三宅小学校の運動会は、祭りの次の日と決まってました。祭で村へ帰ってきた人が次の日に運動会も見えて帰れるようにということです。それほど大きな楽しみだったのです。」《太中》

相撲大会

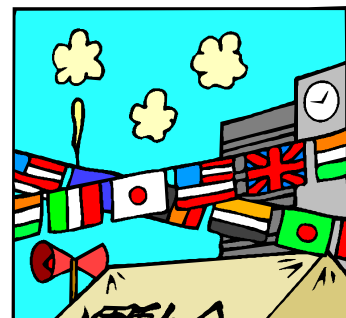
- ・相撲はよく行われていた。山田や茨木など遠くから選手がやってくる大きな大会もあった。
- ・特に強い人はシコナを持っていた。
- ・プロの相撲とりも住んでいた。（普段は農作業をする。今でも墓がいくつか残っている。）

「相撲とりはタレントみたいなもので、オナゴにようもてました。」《鳥飼上》

「夏になるとどこかで青年会が相撲を大会をやっていました。5人抜きなんかに勝つと賞状をくれました。」《乙辻》

山開き

「11月の3日だったかを過ぎると、山田の松茸山が入ってもよいことになります。もうあまり残ってませんが、それでも採れました。」《乙辻》



報恩講(ハウオンコウ)、ホンコさん

- ・報恩講は浄土真宗の宗祖親鸞の追善法要。全国的には飲食の楽しみを伴うことが多いようだが、摂津ではその傾向はあまりない。
- ・昔は決まった日(秋の農繁期以降、暮れまでの間が多い)に多くの人々がお寺に参り、説教師が名調子で説教をする。これを楽しみにしたらしい。
- ・秋祭り以上に露店が立ち並んだところもある。親戚なども集まってくるので、人が多くたいへんな賑わいだった。男女交際のチャンスでもあったという。
- ・近年は、同行(ドウギョウ、近隣に住む浄土真宗の信者で作るグループ)だけで日を決めて、お寺へ集まったり、家に集まってお坊さんに来てもらうなど色々になっている。

「善勝寺のホンコさんは、秋祭りより店がすごかったです。射的、輪投げ、金魚すくい、綿菓子、バナナのたたき売り、ガマの油売り、催眠術は人を動けんようにするとか、歩いている人を止めるとかして見せて、本を売るので。」《鳥飼中》

「覗きカラクリは5銭でした。覗く穴が10個あって、「寛一お宮」「おりえ殺し」などの押し絵が見えて、上で棒でしばきながら説明しました。」《鳥飼上》

「うちの村では、農繁期を除いて、毎月27日にホンコさんをしました。当屋(トウヤ、当番の家)に各家から一人自分のお膳とご飯を持って集まり、おかずは当屋が作ります。当屋が檀家になるお寺のお坊さんに来てもらってお説教を聞き、その後、楽しくご飯を食べるのです。」《鶴野》

「女の人だけが寄り合う尼(アマ)講というのもありました。」《八町》

「戦後しばらくはまだ店が並びましたが、だんだんと寂れて、昭和30年代でなくなったと思います。」《鳥飼下》

いのこ

- ・今年採れたワラを筒にして、中にネギを入れ(良い音がする)、男の子が集団で各家を回って「いのこの晩に、重箱拾て、開けてみれば、ほかほか饅頭(または、ジウベエさんのキンタマ泥だらけ)」と唄いながら、各家を回って門口の地面を叩き付けた。
- ・ポタモチを作るところもあった。(全国的にイノコは餅と関係がある。)
- ・稲刈りの済んだ後の行事として、よく似た行事が全国的に行われている。民俗学の説明では猪の子は多産の象徴であり、豊作や子授けを願ったものといわれる。特に新婚家庭を回ることが重視されたい。
- ・鳥飼地域ではこの行事は無かったという。近隣地域では茨木のごく一部でもあったらしい。能勢の一部では、今でも行われているという。

しめなわぬい

- ・初詣でまでに、神社のシメナワを新しくする。
- ・シメナワをなうことのできる人が少なくなった。ビデオを見て、作り方を覚えたりしているところがある。

「餅米のわらが柔らかくて長いからいいのだが、この頃のわらは短くて大きなシメナワが作りにくくなった。」《味舌下》

餅つき

・正月用の餅をつく日は、29日は「苦の餅をつく」といって避けられ、30日あたりが多かった。

子どもの遊び

(以下は、摂津市域で聞き取った、大正から昭和前半期の子どもの遊びだが、時代が同じなら、どの地域でも似たことをしているように思われる。)

男の子の遊び

ベッタン(めんこ)、ラムネ(ビー玉、コロ)、バイ(ベーごま)、こま回し、戦争ごっこ、釘刺し、凧上げ、しのべ鉄砲、ちゃんばら、竹馬、ヒシ採り(たいら舟)、肝試し、竹とんぼ

女の子の遊び

オコンメまたはオコメ(おじゃみ)、メンコ(オハジキ)、羽根突き、まり突き、縄跳び、セッセッセ、糸取り

共通の遊び

水泳など川での水遊び、ジャコ(雑魚)取り、貝拾い(しじみ、たにし、ドブ貝)、蟹や海老取り、城取り(陣取りの一種、やり方はさまざま)、虫(きりぎりす、蛍、とんぼなど)取り、木登り、缶蹴り、すごろく、いろはかるた、百人一首、輪回し、けんけん、かくれんぼ、かごめかごめ、押しくらまんじゅう、目かくし鬼、ちっぷかっぷ(野球のようなもの)、けんぱ、花いちもんめ、風車、将棋、下駄隠し、中の中の

「バイはバケツか樽にゴザを乗せて、真中をへこませてそこで戦わせる。相手をはじき飛ばす遊びだからコンクリートにすりつけて六角に削りました。数日かかって仕上げるのです。」《八町》

「紙芝居屋は飴を買わないと見せてくれません。割った飴を紙に入れて売りました。」《八町》

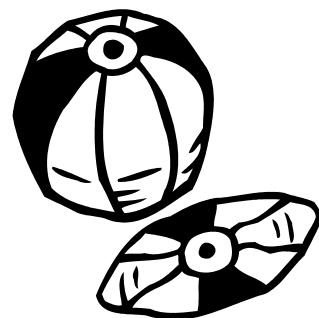
大人の遊び

・「相撲」「力石」以外は、一部に「ケーアイトリ(闘鶏、シャモを闘わせる。“蹴り合い鶏”の意味か?)」ぐらいで、日常的な遊びは無いに等しい。普通の人にとっては、正月、山行き、盆、盆踊り、祭り、ホンコさんといったハレの行事や、サナブリなどの骨休め、たまにする映画や芝居見物が楽しみだったようだ。

・特に女性にとっては、ハレの日も料理や接待に追われ、休まる時はなかったようだ。

「正雀の駅前に歓楽街ができて、カフェなんかも何軒があった。」《乙辻》

「若い頃は、よく吹田へ映画を見に行きました。電車賃がもったいないので歩いて行きました。向こうまで田んぼばかりでした。」《味舌下》



子どものお手伝い

- ・一般に労働力として期待され、色んなお手伝いをしたようだが、中にはあまりしなかった人もいた。以下は、子どもに課せられることの多かったお手伝い。
- ・水車踏み(田への水上げ)、風呂の水汲み、子守り、お使い、牛の草刈り、牛の世話、米搗き。
- ・田植えや稲刈りの特に忙しい時期は、学校は1週間ほどの農繁期休暇になった。

おやつ

- ・寒餅(カンの期間に搗くとカビが生えない)で作ったアラレやカキモチを保存して、1年中のおやつとする。
- ・他には、カタマメ(干したソラマメを煎ったもの、非常に固い。)夏ならマッカ(まくわ瓜)、スイカ、ナンバ(とうもろこし)ぐらいのもの。

「9月になったら、市場池でタライ舟に乗ってヒシを採りました。四つ菱のええやつです。茹でて、2つに割って、竹の先をへべとうして実を出します。栗みたいでそれはおいしかったです。《市場》

遠足

- ・低学年は地域によって大分変わるが、学年が上がるとよく似たところへ行く。布引きの滝と伊勢以外はほとんど徒歩。
- ・三島江のヤエモン屋敷(桜の名所)、藤森神社、一津屋の渡しとこう門、柴島浄水場、安威のイボ水さん、千里山の遊園地、四条暇飯盛山、島本町桜井の駅跡、継体天皇陵、布引きの滝、勝尾寺、阿武山、竜王山。
- ・修学旅行はすべて伊勢神宮

「竜王山へは八カマをはいて下駄でいきました。もちろん高学年です。」《鳥飼下》

「遠足の団体を、淀川の渡し舟で向こうへ渡すのは大変でした。なにしろ、昔はエンジンのないカイの舟ですから。」《鳥飼下》

「新京阪が通ったとき、学校から『電車見』に連れていってもらいました。電車は1輛、急行は2輛で走っていました。」《味舌下》

「大正時代の終わりころ、山田の学校は遠足ということで金剛院へ来て弁当を食べながら汽車見物さしてはった。」《竹の鼻》

学校と先生

- ・小学校6年を卒業すると、高等小学校(高等科)2年、または中学校(または女学校)に進学する。ただし、中学校などに進学するのはごくわずか(ほとんど勉強のできる地主の子)で、女子の場合は高等小学校にも行かせてもらえない子が多かった。
- ・先生は今の先生よりもずっと権威ある重い存在だったらしい。「先生の言わはることは何でも信じた。」「恐かった。何かあると先生に言うぞと言った。」「先生のことは今でも良く覚えている。」といった声が多かった。

「小学校の同級生は味舌村全部で22人しかいなかった。」《竹の鼻》

じゃこ取り

- ・川や池の雑魚や川エビを取って、ジャコ豆(雑魚と豆を炊いたもの)などにして食べた。雑魚やシジミを吹田などへ売りに行く人もあった。
- ・取れたものはフナ、コイ、手長エビ、モロコ、ハス、ドジョウ、ウナギ、ナマズ。その他シジミ、カラス貝、タニシ、ドロガニ。
- ・取る方法は、「ジャックイ」(川をせき止めて水をかい出す、池の水を干す)「アンコ」(モンドリ)「ウゲ」(モンドリのようなもの、辞書ではウケ)「網」(サデ網、投網など)「ヤス」「ウナギガマ」「釣り」

「ドブ貝は、焼いて、口を開いたら醤油をたらして食べます。」《市場》

「淀川で手長エビを取るときは、昼ならタニシをくくりつけた棒を何本も挿しておいて、これに寄ってくるエビを網ですくいます。夜ならカーバイトランプを照らすと寄ってきます。」《鳥飼下》

「祭になるとドジョウ寿司を作りました。ドジョウを付け焼きにして、出刃で細かく刻んで、それで押し寿司を作るのです。」《乙辻》

鴨獲り

「鴨は稲の穂を食べによく田んぼに来ました。ウネ田のウネの間に網を張って、鴨がかかるようにして獲りました。趣味で鉄砲で獲っている人もいました。」《鳥飼下》

結婚式

- ・式場ではなく、新郎の家で行われる。(たいていは夜)
 - ・友人や上司などは呼ばず、親戚の者だけです。
 - ・まず、別室に新郎新婦が入って「三三九度」の儀式をする。次に親戚の居並ぶ座敷での式。仲人の挨拶、親戚代表の挨拶、親の挨拶で式は終わり、披露宴になる。両家の親戚が向かい合い、めいめいの前にお膳が並ぶ。親戚どうしが杯をさし合って、親しくなるようにする。
 - ・村中みんな(特に女性)見に行った。開け放っていることが多く、よく見えた。
 - ・戦争が始まるころまでは、お嫁さんは人力車に乗ってやってきた。(ずっと以前はカゴ)
 - ・式の前日などに、荷見せ(または片づけ)といって、お嫁さん持参の荷物を見せたところもある。
 - ・お嫁さんの荷物の多さは、その家の「株(格)」によって「二荷」「三荷」などと決まっていた。(着物などを入れた「タンス」「ナガモチ」などが「一荷」と数えられるようだ。)
 - ・「三日帰り」といって、3日目にお嫁さんの実家に帰り、お婿さんがお嫁さんの親戚に挨拶をした。
 - ・新婚旅行はしなかった。
- ・恋愛結婚はドレアイと呼ばれてほとんどない。仲人を入れた見合いが普通。

「結婚相手は四里四方といいましたが、特にどこの村が多いとは決まっていません。」《乙辻》

「たいてい同じ株同士で結婚しました。株は昔から決まってしまうので、貧乏になると大変です。付き合いだけは、その株らしくせんらんからです。」《竹の鼻》

葬式

(以下は、摂津市域に多い「浄土真宗」のもの。ただし、村によって若干異なる。)

- ・葬式の一切は同行(ドウギョウ)と総代さんが仕切り世話をする。当家の人は、最初にとの程度の葬式をするかの相談を受けるだけでそれ以外は口出しできない。
- ・手分けして親戚に知らせに走る。
- ・同行や散髪屋さんなどが、大きなタライで湯灌(ユカン、お湯で死者の体を洗う)をし、髪を剃り落とした。それから枕経が上げられる。
- ・その日は親戚だけのお通夜、あくる日は一般のお通夜、葬式はたいてい3日目になる。
- ・村のお墓まで、村中で野辺送り(行列)をした。喪主はカミシモを着た。(火葬場は、以前は各村(旧村、ジグ)にあったのがだんだんと統合されていった。)
- ・野辺送りの先頭は案内人、その両側ではケゴビキといって青竹の先を割ったのを引きずる。次に坊さん、次に親戚の子どもたちが提灯を持って続く。お棺は(戦前は座棺が多かった)を乗せた棺台は身内のものが担ぐ。親族行列に続いて一般の行列となる。
- ・坊さんには傘持ち(ドウシ)と椅子持ちが付く。(これはお寺さんが雇う)
- ・お墓の火屋(火葬場)まで行って、読経と焼香になる。焼香のお供養にキャラメルなどが配られる。子どもには、お供えのイワコシやレンゲの花の砂糖菓子や紙で作った花輪の花などが配られる。
- ・火屋でお棺を焼くのも同行の仕事(同行焼き)だったが、だんだんと専門家に焼いてもらうようになっていった。同行焼きの場合、数人が一晩かかって焼く。つききりの場合、あるいは一旦帰ってときどき火加減を見に行く場合などがある。何枚もの濡れムシロで覆って蒸し焼きにした。
- ・翌朝、親類がそろって骨拾いに行く。
- ・初七日のお供養は饅頭を配った。

「行列が墓場のそばまで来るとそこで止まります。両側口ウソクを3本づつ立てて、これを六道の渡しに見立て、お勤めが始まります。」《鳥飼上》

「同行5人ほどで、焼けるまで番をしているとき、焼けてきたらボンというて仏さんが立たはるとか、いろいろ怖い話を聞かされました。さんざ聞かされてから、10時ごろになって、酒と弁当を取りにやらされた時は、恐うて難儀しました。」《乙辻》

「葬式の時に、太中独特の仏花を飾ります。それを作る練習と伝承のために講があるのです。」《太中》

ご馳走

- ・ご馳走といえば決まってカシワのスキヤキになる。正月、盆、祭、結婚式、法事、来客時などに、家で飼っている鶏を絞める。1時間ほどの作業。少し固いが味は今の鶏とは比べものにならないという。
- ・肉や海の魚はめったに口に入らなかった。
- ・普段は麦飯だから、正月に食べる白いご飯もご馳走だったという人もいた。

力石（ちからいし）

- ・昔は、たいていの村に力石があり、若者たちが力試しや力比べをした。
- ・お宮さんや集会所の前などに重さの違う何個かの石が置かれていることが多かった。
- ・重さはまちまちだが、たいていは普通の人では持ち上げられない。
- ・「腰をかけてはいけない」など、神聖な石として扱われた。
- ・大正の頃から衰退し始め、昭和初期にはほとんどやらなくなった。だから、現在では「持ち上げているのを見た」人は残っているが、「持ち上げた」人は見当たらない。
- ・石が保存されている地域は、摂津市内で数ヶ所ある。
- ・米俵を使って力比べをしたところもある。

「はじめはジョリ（草履）をはいて担いで、それができると下駄をはいて担いだようです。」《鳥飼上》

「みんなで排水を良くするための草刈りをしている時の休み時間に、力石が始まったので見ていました。力自慢の人だけが持つので、たいていの人は見ているだけです。腹に力を入れるので、よく屁の音が聞こえたのを覚えています。」《太中》

買い物と行商

- ・昔は、どの地域でも店が少なく、買い物に出かける場合は吹田、茨木、天六、千林、天満などに行った。（地域や買い物の内容によって、行き先が違った。肥汲みや野菜の卸のために大阪市内に出かけたついでに買い物をすることもあった。）
- ・行商が多く来たところとあまり来なかったところがある。
- ・聞き取りに出てきた行商を数え上げると魚屋、豆腐屋、果物屋、乾物屋、薬屋、オカズ屋、飴屋、農機具屋、衣服屋、イカケ屋、（鍋釜の修理）、下駄直し、ラオシ替え（キセルの竹筒の付け替え）、こんまき（昆布巻）屋、カシワ屋、瀬戸物屋、カゴやミノ売り、コボレウメ売り～頻繁に来る行商と、たまにしか来ない行商がある。
- ・行商は掛け売りが多かった。払いは年に二度の節季（セッキ、支払い日）だった。
- ・不思議なことに、売り声を覚えている人はあまりいない。町中と違って売り声を出さなかったのかもしれない。
- ・商店は少なかった。聞き取りで出てきたのは、タバコ屋、塩屋、油屋、文房具屋、駄菓子屋、魚屋、カシワ屋、揚げ物屋。商店はたいてい現金取り引きだった。

「大阪へ買い物などに行くために、守口へ出て市電に乗ると、六銭でどこまでも行けました。乗り換え切符もくれました。」《鳥飼上》

「魚屋が自転車で回ってきました。戦前の方はサカナヤ - という売り声だったのに、戦後の人はゴツツオヤ - と言いました。魚はごっつお（ご馳走）でした。」《太中》

「金など無かってもあるていどは暮らしていけました。なにしろ米はある。野菜や漬物はある、味噌は作っている。魚は川じゃこを取れば良い、茨木くらいなら歩いて行く。」《八町》

「千里丘ができた昭和 13 年頃は、まだガードがなくて踏切でした。踏切のこっち（西）側にウドン屋が一軒あっただけで、それからこっちはずうっと何もありませんでした。」《市場》

病気と医者

- ・昔は、摂津市域のどこの村にも医者は居なかったようだ。(昭和 3 年に正雀駅ができて、初めて正雀で医者が開業) 岸辺のウエシマさんや山田のゴトウさんや茨木や江口など、遠くの医者と呼ばれに行き来してもらった。
- ・しかも、医者にかかると非常にお金がかかるので、よほどのことがない限り、医者には掛れなかった。

「お金持ちでない限り、医者が 2 , 3 度出入りした頃には、もう危ないということが多かった。」
《別府》

服装と履物

- ・子どもの通学の服装が着物とゾウリから洋服と靴に川っていったのは、昭和の初年頃から。

燃料と暖房

- ・摂津市域は山がないため、燃料の乏しい地域である。
- ・炊事や風呂はワラを燃やした。餅つきときは割木を買った。
- ・昔から囲炉裏(イロリ)はなかった。火鉢もめったに使わなかった。暖房はタドンを入れたコタツくらいであった。

生活用水

- ・風呂や洗い物は水路の水で十分だった。ホタルもいるきれいな水だった。
- ・飲料水は主として井戸。カナケがある場合は壺に砂やシュロや木炭を敷いて、こして飲んだ。仲間井戸(共同使用)もあった。
- ・千里丘方面では、泉が湧き出すところがあった。竹のパイプで水道のように各家に配られた。

「昔はあまり井戸も掘らず、川の水を使いました。きれいな砂の川州を水が湧くところまで少し掘って、石ぐろで囲ってあります。ここから汲むのです。そのまま飲みました。砂を通ってくるからきれいなもんです。」《鶴野》

「ハネギいうて、長い棒の端にニガイという桶をつけて、反対側に重りの石を付けたもので、水を汲み上げる井戸もありました。」《別府》

風呂

- ・燃料の乏しい地域なので近所で風呂を沸かす順番を決めたりして、お互いにもらい風呂をすることが多かった。ゴエモン風呂だった。
- ・金持ちの家は別として、外で石鹸をつけて洗うことはほとんどしない。同じ湯に何人もが入ることになる。
- ・夏はタライで行水(ギョウズイ)をする。水を入れておけば熱くなり、十分そのまま使える。

ゴミ

- ・生ゴミは屋敷地の決まった場所に埋めた。ミミズが繁殖して、スイカやマクワを作るときの良い肥料になった。
- ・燃えるゴミは燃やした。だから、残ってしまうゴミはほとんどなかった。

かまど

- ・たいていは作り付けのヘツツイさん。。小さい順に「五合釜」、「一升釜」、「八升釜」などと3つか5つ並ぶ。奇数でないと良くない。

お膳

- ・個人別のお膳が普通。座る場所も決まっていた。

屋号

- ・古い家には、苗字の他に屋号があった。
- ・自分の家の屋号を誇りに思う人もいれば、逆に嫌がっている人もいたので、面と向かって屋号で呼ぶことはまずない。

伊勢音頭

- ・祭の道中(宮入やおねり)の時、伊勢音頭を歌う。
- ・棟上げの時にも歌う。
- ・昔は、結婚式でも誰かが歌うことになっていた。

「大正天皇のご大典(タイテン、即位式)のとき、青年団がオナゴの長襦袢(ジュバン)を着て、伊勢音頭を歌いながら踊って歩きましたんや。役持ちや金持ちの家に行くと、その家は歓待しました。家の中でも踊り続けるから、床が落ちた家もありました。阿波踊りみたいな踊りですわ。」《鳥飼上》

「このごろは正調(正しい節と歌詞)を歌える人が少なくなりました。ただし、正調というも所によってちょっとずつ違いますんや。」《鳥飼下》

作業歌

- ・ずいぶん昔には、「田植え唄」「千本突きの唄(堤防を突き固める作業をする時に歌う唄)」などがあったといわれているが、聞き取りでは誰もが「歌ったことがない」という。

奉公

「われわれの親が子どもだった時分には、親が何年分かの前金をもらって子どもを奉公に出すということがあったらしい。子守りや馬の鼻持ちができるようになると、奉公にやられる人がいたということだ。親に金が出来て持っていくと、途中でも戻される。奉公に行っている間は親は直接逢わないで、カラケシで「がんばれ」とか「しんぼうせよ」とか書いた紙に石を包んで投げて寄越したということだ。」《別府》

夜の暗さ

- ・夜は今と違って非常に暗く、人通りも少なかったから、夜道は恐かった。
- ・暗い道を通ってお墓まで行く「肝(キモ)試し」なども行われた。

「宮さんの向こうのタバコ屋へ行く道(別府の中心の道)でも、子どもには恐かった。白い浴衣が干したままになっているのを幽霊と見違えて大騒ぎになったこともある。」《別府》

静かさ

- ・昔は非常に静かなので、遠くの音がよく聞こえたようだ。

「子どものころ、大阪の市電の音が聞こえました。チンチンと。千里丘の駅がセンリオカーと言ったはるのも聞こえてました。」《中内》

鳥飼の渡し

- ・鳥飼西にあった「三本松(願正寺)渡し」と鳥飼下の「治歩多(ジブタ)渡し」が一本化して「鳥飼の渡し」となり、昭和の初期から、大阪府の公営の渡しとして無料で運行されていた。昭和49年に廃止された。

「渡しに乗るのは、京阪電車に乗る時か、河内へ用事があるときだった。」《鳥飼中》

蒸気船

- ・明治初年に、当時の世界最新の外輪蒸気船が輸入され、明治、大正、昭和にかけて淀川を上下した。鉄道の開通と共に、客船としてより引き船としての役割が中心になっていった。

「瀬と呼ぶ10メートルほどの流れの強い部分を、蒸気船が通れるように掘り下げたり、浅瀬に標ミオを立てたりする仕事を請け負った蒸気トラという人が上の村にいました。」《鳥飼上》

蒸気船が浅瀬に乗り上げて動けなくなったことがありました。舟に乗って見に連れていってもらいました。上がってみると立派なもので風呂まで付いていました。」《鳥飼中》

淀川・堤防・中州

- ・淀川は長年の間、人員と物資を(だから文化も)運ぶ大動脈であり続けた。また、農業用水等の恵みをもたらし、洪水という災害をもたらすなど、暮らしと深く関係した存在であった。
- ・堤防は、長い間、主要な道路であり続けた。昭和2年からは路線バスも走った。
- ・堤防は何度もかさ上げされた。中州の土をイキスカという機械で掘って、それを土汽車で運ぶという大工事をした。中州の土は砂でなく泥だったので堤防は固まった。
- ・堤防は洪水の避難場所でもあった。
- ・堤防と河川敷で乳牛を飼っている人もいた。

「子どものころ、淀川を泳いで渡りました。今よりずっと川幅が広く、半分くらいは浅瀬や砂浜で、歩いたり泳いだりして渡ります。流れのきついところもあります。川の様子を知らない子はここで足をとられて死んだりするのです。」《鳥飼下》

「中の村の中尾さんは、淀川の水を使って作り酒屋をやっておられました。冬になると、東北が

ら何十人もの人が働きにきました。2月の一番寒い頃、しかも夜中の1時か2時頃から2時間ほど、淀川の水を汲み上げて運ぶのです。この時の水が一番きれいなのです。川の向こう岸を流れている木津川の水は特にきれいなので、わざわざ舟で向こう岸近くまで行ってそこで汲むのです。」《鳥飼下》

「中洲も耕作権があって、子どもころ勝手に草を刈ると怒られました。うちの村の人は桑や榎など水に強い木を植えていました。」《鳥飼上》

「流れてきたドーザエモン（土左衛門、水死人）が島に引っかかることがよくありました。死体処理をどこがするのかという関係で、そこが河内か摂津かがよく問題になりました。」《鳥飼上》

河川改修

・淀川、安威川、大正川などの河川改修（直線化、堤防のかさ上げなど）がしばしば行われた。昔は地域の人々が作業に出て貴重な現金収入を得た。

「曲がっていたためによくあふれた丑寅（ウシトラ）川を廃川にして、直線の大正川を作る工事は大正の終わりから始めて、昭和3年までかかりました。当時は新川と呼びました。子どもの頃でしたので、よくトロッコに乗って怒られました。新川ができてすぐ後のご大典（昭和天皇即位式）のとき、チョコマといって千本突き（堤防を突き固める仕事）の女の人の格好で行列をしました。」《乙辻》

水路の整備

・大規模な整備事業は「神安水利組合」に任せて、日常的な世話を村で行う。
・作業の中心は、田んぼに水を入れる前に、草や藻を刈り取ったり、底をさらえたりして、水がよく流れるようにする。
・村の共同作業。人手の足りない時は、村から金を出して人夫を集める。

「水路に架かっている橋は、稲を積んだ舟が下を通れるように、背を高くしてありました。」《鳥飼上》

土地のかさ上げ

・低湿な田んぼをつぶして建物を建てる時、地上げを必要とする。昭和11年から操業したカネカ（前身の会社）は、敷地内に大きな池を掘って、その土でかさ上げした部分に工場を建てた。

「薫英も池を掘って地上げをして建てました。この池で女の子が溺れて死にました。浪工のときは、道路が出来ていたので、山の土を運んできました。」《味舌下》

浪曲、猿回し、にわか

「家へ浪曲に来てもらうところもありました。」「正月に猿回しがきました。赤と白の捻った紐でつないで。知らん顔をしていおうとすると、猿がバンと肩へ飛びついてきました。帰らさんようにしつけてるんですね。」「ご大典のとき、下の村の人が花笠着たり仮装をして回ってきて、中にニワカする人がいました。傘を広げて踊ったり、芝居のみえを切ったりしてました。女役の人が、『旦那さん、あなたの傘の上に鳥が2羽止まっています。ニワカ、ニワカ』このニワカ

だけ覚えています。」《中内》

お参り、講

「19になると八幡さんへ矢をもらいに行きます。お腹が大きくなると中山さんへ帯をもらいに。デンボヤという石切りさんです。」《中内》

伊勢講

「昔は伊勢講もありました。親父の時代には、幟を立てて暗がり峠を越えて歩いていったものだと聞いています。帰ってくると一人前として認められたのです。」《鶴野》

八幡参り

「秋祭りを済ませると、幟組（ノボリグミ）ごとにその組区域の家から、1軒まえに50銭とか1円とかを口ウソク代というおおっぴらに集めて、それで八幡へ行ったり、いっぱい飲んだりしました。若い者は帰りに橋本（遊郭）に寄ることになります。」《味舌》

「たいていの青年団は、正月三が日のいつかに、石清水(イワシミズ)の八幡さんにお参りに行きま

した。八幡さんにお参りに行くと、橋本が枚方に寄ることになるのですが、正月は高いので橋本や枚方は別の日にします。カンザシを買うことになっていました。」《鳥飼下》

「夜に山崎の渡しを渡るときは、オーイと船頭を呼ぶと来てくれるのです。中州で一度舟を乗り換えました。」《太中》

大峰山

「特定の人だけの講として、大峰山へ行く行者の講が、鳥飼の牧跡の碑の近くにあって、ゴマをたいたりしていた。」《鳥飼下》

「これは明治の見天（ケンテン）切れの大洪水のちょっと前に、見天にあったお地藏さんに移したものです。見天とは海の方の天を見て天気予報をするという意味で、そんな神さんに移したから、見天の所で切れたんやといわれていた。」《鳥飼下》

「下市（シモイチ）から洞川（ドロガワ）まで、1日かけて歩きます。次の日は山に登って吉野に下るんです。えらかった。戻ってきて家へ入ったらあかんです。女の人が道でぎょうさん寝て待ったはる。初めて大峰にお参りした女っ気も何も知らん若い衆にお腹をまたげてもらいと、安産できるといわれていたからです。」《鳥飼下》

県神社

「この辺では伊勢講の話はあまり聞かないです。この辺で講を組んで行ったのは、宇治の県神社の祭りです。お祭りの前の晩、真っ暗闇の中で神さんのお渡りがあるのです。2時間ほどは旅館も真っ暗、タバコを吸うためにマッチを擦っても怒られる。その間は無礼講、男女の関係はおおいにやりなさいという祭です。」《鳥飼下》

柳谷(観音)講や多賀(滋賀県)講もあったという

戦中戦後の生活

・戦争中から物の売買は厳しく統制された。特に米の統制は厳しく、戦後も長く続いた。摂津市域は米作地帯なので、都市部から乾物や着物などを持って米と交換に来る人がけっこういた。ダイキンなどに働きに来ている人を相手に米をヤミ(闇、不正)で売る人もいたという。

「戦争中、すぐ隣の井高野から子どもが疎開に来ていた。初めは講堂で生活していた。1 学級は 80 人ぐらいにふくれあがった。」《別府》

「出征兵士を送る時、宮さんに集まって、太鼓を打ち、ラッパを吹いて、千里丘駅まで送りました。」《太中》

昔の子どもの遊び歌

(中内の小原旬子さんと小林広子さんが歌ってくださったもの～テープあり)

「羽根つき」 ひとめ、ふため、みやこし、よめご、いつやの、むかし…

「押し合い」 押せ押せごんぼ、出たもん負けや…

「おこんめ(おじゃみ)」 おこんめ、おこんめ、ほい…さらって、落として、お皿

「鬼さんこちら」 鬼さんこちら、手の鳴る方へ…

「かごめかごめ」 かごめかごめ、かごの中の鳥は…

(途中で待ってもらいたいときはチュウミとかミッキとか言う～他の遊びの場合も同じ)

「なわとび」 大波小波、ひっくり返して、じゃぶじゃぶ

「なわとび」 郵便屋、配達屋、お上のご用でえっさっさ…

郵便屋、配達屋、葉書落ちました。一枚二枚…

「つり目」 つり目、さがり目、ぐるりと回してにゃん目の目

「せっせっせ」 せっせっせ、夏も近づく八十八夜…

せっせっせ、旅順開城約なりて、敵の將軍ステッセル…

「下駄隠し」 げたかくし、ちゅうねんぼ、えんのしたのねずみ…

「ぼんさん」 ぼんさんぼんさんどこ行くの、ぐるりと回って酔買いに…

「中の中の」 中の中のこぼとけさん、なんで背が低い…

「てまり」 いちばん初めは一の宮、二で日光東照宮…

「いちれつだんぱん」 いちれつだんぱん破裂して、日露戦争始まった…

「蛭捕り」 ほ、ほ、ほうたる来い、こっちの水はあまいぞ…

「いのこ」 いのこの晩に、重箱拾ろて、開けてみれば…

「ことば遊び」 鬼のいんまに洗濯しましよ 雨かジャカヒナサンか

《米作りを中心とした農業》

きびしい農作業

- ・摂津市域は、もともと米作中心の純農村地域。
- ・水はけの悪い一毛作田では、田ゲタ田舟が利用され、ヒルに血を吸われながらの作業となる。一軒あたりの耕作面積は比較的広い。農閑期は淀川の堤防工事など外での稼ぎやムシロ編み(味舌が中心、ミシロと言う人が多い)などをした。
- ・二毛作が可能な土地では、裏作として麦、菜種、綿、野菜等が作られた。何を主に作るかは地域によって異なった。
- ・米作りは苗代作り、田植え、除草、稲刈り、脱穀といった作業だけでなく、肥汲みなど肥料の確保、水路の管理と補修、除虫などもあり、非常に手がかかった。「あんな苦労は二度とできない」「みんながしていたから自分もできた」と古老はいう。それだけに収穫の喜びは大きかったようだ。
- ・洪水や日焼け(水不足)になると収穫は激減した。それだけに、用水の確保や悪水排出のために大変な努力をし、また災害とたたかうすばらしい協力があった。百年を越える歴史を持つ「神安土地改良区」(水利組合)が重要な役割を果たし続けた。
- ・役畜は牛、戦前は何軒かで共同で持つ「回り牛」が普通。「馬小屋」で飼った。(だんだんと、各戸持ちの「丸牛」に移り、昭和30年代の後半には機械にとって替わられる。)

米作り作業の1年間

(八町での聞き取りを中心に)

田起こし(あら起こし)

- ・冬の初めに、牛にカラスキを引かせて田の土を粗く起こす。冬の間は土を凍らせることによって、細かく砕きやすくなる。
- ・冬の間は田に水を張って凍らせる湿田は、土が自然に乾いてくる3月頃に田起こしを行なう。

あえ

- ・田起こししておいた土を、クワで細かく砕く。

種籾(タネモミ)の用意

- ・カマスに入れて1週間ほど川や池に浸ける。(芽を出やすくするため。)

苗代作り

- ・4月の終わりまたは5月のかかりに、自分の田んぼの中で水を入れやすい部分に水を入れ、苗代を作る。
- ・平たいウネを作り、板(ナラシイタ、ナワシロゴテ、へら)できれいに均す。

- ・ウネの上に水気を切っておいた種籾を蒔(マ)き、カマドで出来るワラの灰をかぶせるように撒く。(日光の暖かさを取り入れる。根の部分の土が「やさしく」なり、苗取りが楽になる。)
- ・約35日から40日育てる。

田の虫取り

- ・主に子どもが、学校から連れられて、苗代の苗の葉に付いた虫の卵を取る。学校へ持って帰ると鉛筆などがもらえる。

水入れ

- ・田んぼに水路から水を引き入れる。

代かき(田こなし、田こしらえ)

- ・牛にウماغワ(マグワ)を引かせて、土を柔らかくし平らにする。

元肥(モトゴエ)入れ

- ・代掻きの時に、肥(主として野壺にためておいた下肥、人糞)を入れる。

苗取り

- ・苗代の苗を取って束ねる。

田植え

- ・田植えは6月の15日とだいたい日を決めていた。
- ・この辺(八町)では自分とこの田は自分とこで植える。村で寄り合って植えたりはしない。
- ・1人で1日に1反植えたら一人前といわれた。
- ・田植え縄を使って、まっすぐ等間隔に植える。後で除草機が使えるために。
- ・田植えする人にとってちょうど良い場所に、苗を投げておくことを「苗うち」という。これがなかなか難しい。持っていた苗がちょうど無くなった時、体のすぐ後ろに苗の束があるというようにしなければならない。

水入れ

- ・土用の干し上げまでは、水を入れ続ける。水が少なくて入りにくい時は、水車(足踏み水車)で上げる。

田の草取り、追い肥

- ・田植えから土用(7月20日頃からの18日間、最も暑く日照りが厳しい)干しまでの間を中心に、何度も草取りをする。
- ・まず「カキ押し」(掻き? 柄の先に何本もの爪を付けた船形の道具を前後に動かして、雑草の根を切る)これは後に、二つ並んで2条掻けるもの、次に回転爪のあるものと改良型

になっていった。

・続いて手作業となる。まず、1番草を取る「あら(新?)草」それから2番草の「中草」3番草の「塗り草」これは「追い肥」をやった後、シャカン(左官)屋みたいに泥を塗り付けた。草がはえないように。

・それでも草は生えてくる。だから、稲が大きくなった頃「ひえ抜き」をする。

・かんかん照りの中で、腰を曲げてする、それは口では言えんえらい仕事だ。草との戦いだ。薬が出てきて、どれだけ助かったか。

土用干し(干し上げ、干し田、中干し)

・土用のかんかん照りのころ、水を抜いて、田を干す。

・土地にひびを入れると、次に水を入れた時に成長が良くなる。

・土地を固めて「床」を作るという意味もある。床を作っておくと、水を入れても土地がぐずぐずにならないので、稲刈りがしやすい。

・湿田地帯だからやることで、山側ではこれをやらん。もし、忍頂寺や清溪や安威や福井でこれをやったら、向こうは「かご地」だから、水がだだ漏れになる。水コシみたいな田になってしまう。

敷き草

・土手の草を刈ってきて、肥料にするために敷く。これは熱心な人がする。

イナゴ取り

・イナゴを取って、筒の付いた袋に入れる。鶏の餌にする。(戦中戦後の一時期は食べたという話もある)

田刈り(稲刈り)

・早稲は10月のかかり、中手は祭りが過ぎた10月の中・下旬、奥手は11月に入って刈る。

稲木かけ

・木は持っていくのが重いので竹を使うことが多い。竹のほうが早く腐るが。

・10日ないし2週間干す。

・天日で乾燥させると味が良い、ワラの栄養分がみな米に行くといわれる。近頃はこれをしてないからまずい。

いねこき(脱穀)

・干し終わった稲束から籾(モミ)ははずす。脱穀機(回転するドラムの外側に逆U字形の針金を付けたもの)を使う。脱穀機は足で踏むのから動力へと変わっていった。

・乾田では田で作業する。湿田では家の庭まで持ち帰る。

- ・混じったワラくずなどを風で飛ばしてより分ける。

日干し

- ・脱穀した籾をムシロに広げて天日で干す。

籾(モミ)すり

- ・籾の皮をむいて玄米にする。
- ・大正から昭和の初め頃は土臼(土で作った臼)でやったが、発動機の付いた機械ができ、3インチの機械を実行組合で買った。
- ・二人の人が籾すり機を持って各家を回った。引いてもらった量に応じて(反別に)日当を支払った。

精米

- ・保有米はクロ(玄米)で保存する。
- ・以前は実行組合で精米機を持っていたが、近年は個々に小さいのを持つようになった。
- ・食べる前に精米するほうがおいしい。

(注1 ~ 湿田での米作り)

- ・摂津市域はドタ(湿田)が多く、そこでは一毛作となる。したがって、野菜作りなど大都市近郊農業の利点は十分には活かせない。ただ、大阪の米相場の動きをにらんで、上がった時にすぐに持ち込むというまみはあったという。
- ・ハダシか板ナンバを履いての作業、畑のようにウネを作った田(うね田)、自分の土地の一部を掘ってその土で田んぼのかさ上げをする(うち池)、舟を使った運搬、下敷きというワラやムギワラを暑く編んだものを敷いてする稲コキの作業などさまざまな工夫と苦労があった。
- ・用水の確保より悪水の排出の方が重要な問題となる。
- ・牛使いが難儀なこと、牛がいやだったという話がよく出る。

(注2 ~ 千里丘陵近くでの米作り)

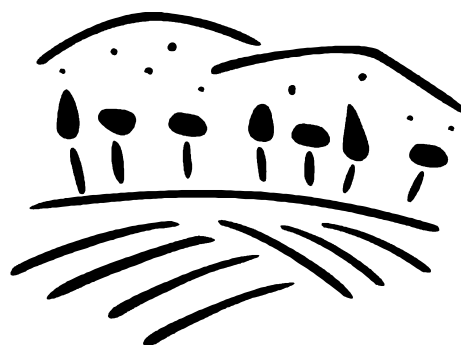
- ・用水の確保が重要な問題となる。川を塞ぎ止めたり、溜め池を掘ったり、野井戸を作ったりとさまざまに努力をした。
 - ・ずっと昔は、時には水争いもあった。川の上流と下流、溜め池からの距離によって利害が対立するので、その調整にはさまざまな苦労と工夫があったようだ。
 - ・麦、菜種、野菜なども作れ、都市近郊農業の利点は生かされた。
- 「農作業の中で何が一番えらかったかと聞かれたら、やっぱり草取りです。取り入れも大変だけれど、どんどん片づいていく感じがあって張り合いがありました。」《鶴野》
- 「競争みたいに稲刈りを済ますと『鎌納め』、脱穀が住むと『箸納め』、モミを取る臼を牛に回させて、唐箕(トウミ)で分けて、済んだら『臼納め』と3回も忙しい中で行事をします。ぼた餅を作ったり、かやく飯を炊いたりするのです。」《竹の鼻》
- 「今の新幹線の基地あたりはひどい泥田で、ここらでは沖(オキ)と呼んだのです。道などなくて、みんな舟で通ったのです。」《八町》

「池の水を上流から次々と分配しながら入れていくのは、村から毎年交代で出る人足2人です。この2人には、誰も口を挟めないことになっていました。だからもめることはありません。」《庄屋》

肥汲み

- ・化学肥料が出回るまでは、人糞が主要な肥料だった。草を刈って腐らせた堆肥やホシカという干したイワシやニシンを細かく砕いたのも良い肥料になった。
- ・牛に馬力を引かせて、年に10回くらい大阪まで行く。
- ・たいてい夜中過ぎか朝でも暗いうちに出て、日が高くなならないうちに帰ってくる。特に夏場は日が高くなると、牛がへたばってしまうから。
- ・通いなれると、牛は道を教えなくても勝手に正しく歩く。
- ・大阪に、ある範囲の汲み取りに責任を持って、仕切っている人がいる。その人があそこへ行けここへ行けと指図する。町の人はその人にお金を払って汲んでもらうのだが、こっちもその人にサービスに米などを持っていったりする。仕切っている人自身が汲んで、保存して売ることとする。
- ・米作りで肥が必要なのは春と夏だが、麦や菜種や野菜を作るとなると、冬でも秋でも必要になる。
- ・撒くまでは野壺に貯めておく。
- ・田んぼまでは馬力が入らないから、田へは舟で運んだ。
- ・鳥飼、一津屋、別府あたりでは、大阪まで馬力でなく舟で行く人もいた。そういう人は自分で汲まないで買い付けてくることになる。
- ・中には肥舟を持っていて、肥を運ぶことを仕事にしている人もいた。
- ・淀川の場合、行きは流されていくが、帰りは蒸気船に引いてもらって上る。少し上流で切り放して、斜めに下りながら岸に着いた。そこからはオウコで担いで、堤防を越えて田んぼのノツボまで運ぶ。
- ・蒸気船は昭和30年頃になくなった。それから馬力を買って、これで汲みに行った。

「自分らの小さい頃、安威川で帆掛け舟をよく見ました。みんな肥舟です。夕方なんか並んで帰ってくるのです。上の茨木が高槻の船だったのでしょ。」《味舌》



《地場産業》

メリヤス

・明治30年から鳥飼村にメリヤス生地とメリヤス靴下の工場ができる。摂津市域で最初の近代工業である。文化と物資輸送の幹線道路であった淀川に面していた、という条件によるものと考えられる。

・特に第1次世界大戦(大正3～8年)後の好況期には輸出も増大し、昭和初期が最も盛んだったといわれる。(昭和11年時点で従業員5人以上の工場で9工場。)

「戦争になると糸が回ってこなくなりました。それに和歌山に大きな工場がどんどん出来て、鳥飼の小さな工場は次々と権利を売ってやめていきました。」《鳥飼上》

ウド

・一津屋村史によると、明治10年の収穫高は4,500貫。

鳥飼ナス

・鳥飼村史によると、昭和7年収穫高は6,250貫。高品質で料亭などに引き取られた。

ムシロ

・江戸時代から味舌ムシロが有名。大阪市場での取引の標準になっていたといわれる。味舌以外の村でもムシロを作っていたが、集荷業者が味舌にあり、その近辺で特に盛んだったようだ。

縄

・主として冬の仕事。まずわらのシブを取って、ヨコヅチで打って柔らかくして、それを縄ない機にかけて縄にする。売る場合は実行組合にある機械にかけて、ヒゲを取りヨリを強くかける。

柳コウリ

・摂津市史によると、明治20年代から三島郡で広く生産されるようになった。摂津市域の記録では、昭和4年現在、鳥飼、三宅で各2戸が製造にあっていたという。

・市史によると、原料のコウリ柳は井路縁などで栽培したとなっているが、今回の聞き取りでは「稲刈りの済んだ田んぼに挿し木をした」と聞いた。

「昔の稲刈りは11月の暮頃でした。湿田の稲を刈ったあとに柳の新芽を挿しておくのです。そして4月の終わりか5月の初め頃、菜種の花の咲く時分に伸びた新芽を刈り取ります。それを持って帰って筋取りをすると、柳コウリの材料になるのです。」《別府》

苺

・昭和3年に正雀駅が出来て、味舌で行楽客目当ての苺栽培が始まった。

「吹田や天六まで、苺狩りの宣伝ビラを配りに行きました。ビラには「正雀よいとこ」とか、「新京阪で15分」などという文句の入った歌が載っていました。人寄せのため、漫才など芸人を呼んで余興もしました。」《味舌下》

「苺はあまり続きませんでした。10年でしまいです。明日は日曜日だからたくさん来ると期待していても、雨でも降れば誰も来ません。全部ジャム行きで、商売になりません。」《味舌》

ケシ

「花の咲いた後に丸いケシ坊主ができます。夕方になってから、それにカミソリで3本ほど筋を入れに行くのです。するとそこからねばっこい汁がにじみ出ます。それを次の日の朝にしごき取って缶に入れて持って帰ります。それをきれいに延ばして乾かします。そしたらダラスケみたいなものになるのです。これが阿片という麻薬になるのです。」《鳥飼下》

「乾いたのを集めて、府庁に持っていきます。府庁では、目方と(含有)度数を測って、お金を下げてくれます。」《庄屋》

綿

「変電所の裏あたりは砂の目が細かくて、土が固く締まって綿以外は作りにくかったのです。戦前は綿ばかり作っている家が7、8軒ありました。「糸繰り」をよくさせられました。ローラーを回して細かいところと通すと、種がはずれて手前で落ちるのです。糸にしないで、そのまま綿屋に売っていたと思います。」《別府》

シジミ

「別府のミヤノウラ(井路)ではシジミがよく取れた。たいていは自家用にするが、テンピン棒でいおう(担っ)て吹田や大阪に売りに行く人もいた。百姓がハッピーを着ているのを見られると、出稼ぎに行っている証拠だとして、年貢はまけてもらえなかったと聞いています。」《別府》

川砂

「ガサというて、舟を持っていて、神崎川が多かったが、ジョウレンで川砂を上げる仕事をしていた人もありました。」《鳥飼中》



《郷土を襲った大きな災害》

明治29年 見天切れ

- ・9月11日、鳥飼西の見天で淀川堤防が決壊。別府で安威川堤防も決壊。
- ・あふれた水は安威川や神埼川の堤防を乗り越え、北大阪全域に大災害。

大正6年 大塚切れ

- ・10月1日、高槻の大塚で淀川堤防決壊。芥川、安威川、神埼川堤防も決壊。北大阪全域で大災害。

「大塚切れがあって堤防は高くされますが、それまでの堤防は低いもので、ちょっと水嵩が上がれば、堤防から手が洗えるくらいのものでした。」《鳥飼上》

「大雨から実際に水が来るまで5日ほどかかりました。上の方から次々と水を抱くからです。」《鳥飼上》

「お風呂に入っていたら、急に水が家の中に入ってきました。あわてて堤防に上げてもらいました。それから多くの人と堤防で暮らしました。家は流れる、牛は流れるで大変でした。」《鳥飼上》

「50日間も水が引かなかったので、その間はみんな天幕など今でいう仮設住宅暮らしでした。」《鳥飼下》

「あの時不思議な現象が起こりました。1反ほどの大きさの蓮池を刈った葦で埋めて、その上に土を乗せて田んぼに作っていた部分が、生えた稲をのせたままポコンと浮き上がってきたのです。しかも、水が引いていった時、元の位置にきっちり納まったのです。」《鶴野》

「善勝寺には、今でも洪水の時のための舟が置いてあります。」《鳥飼下》

大塚切れは大変な災害でしたが、一方『大塚切れならまたおいで』という言い草も残っているのです。まず全国から救援物資がどんどん送られてきた。小米（充分実っていない米）はある程度獲れたのに、小作料は出さなくてよかったからです。」《鳥飼下》

昭和9年 室戸台風

- ・現在のような天気予報もなかった時代で、大きな被害が出た。台風が大阪を直撃したのは、午前8時過ぎ、味舌小学校では2階建て校舎が倒壊し、登校してきた児童5人が下敷きとなって死亡。また20人が重軽傷を負う。鳥飼小学校の2階建て校舎も倒壊し、児童1人が死亡した。大阪府下の死傷者行方不明者は1万人を越えたといわれている。

「あれはすごい風でした。瓦の屋根が飛び、家は浮く感じでした。ここではワラ葦きの納屋式の家が2軒こけました。」《鶴野》

「登校していた子どもたちは、校舎をとび出して、山田川の堤防の内側へ避難したから、本当はみんな助かっていたはずなんです。ところがなんでやられたかという、その日が貯金日だったからです。持ってきたお金を置いたまま逃げ出したことに気が付いた子どもが、何人も校舎に戻ったのです。その時バンとやられたのです。あの頃はみんな貧乏だったからです。」《味舌下》

第 2 次世界大戦

「大阪へ肥を汲みに行っている時、大空襲になりました。焼夷弾が雨のように降る中を、車から牛を外して、ケツをどつきまわして、必死になって長柄の橋を渡って帰ったことがありました。」

《鶴野》

「この辺で爆弾が落ちたのは、油脂焼夷弾が 2 発、麦を作っている畑に落ちたという程度です。」

《鶴野》

昭和 21 年、22 年 水不足

- ・2 年連続の日照り続きで、田畑の「日焼け」に苦しむ。
- ・普通の年なら水の多さに悩む鳥飼地区も、むしろ水不足に悩まされた。

「市場池の水が干上がって、底が現れて野球ができるほどでした。今の森川市長のところの井戸を掘ってもらって、必死で地下水を汲み上げました。それでも水が足りないので、三丁目より向こうは配水を止めました。すると、夜中に鍬を手にした人たちが、巡査を連れて抗議に押しかけてきました。」《市場》

昭和 28 年 洪水

- ・台風 13 号で淀川上流の芥川が決壊し、鳥飼、味生地区が長期間水に浸かる。

「水が堤防の上すれすれにまでなって、このあたりの堤防ももう少しで切れかかって、ぐずぐずになってきよりました。」《鳥飼下》

昭和 42 年 集中豪雨

- ・豪雨により、山田川、大正川、安威川、境川決壊。安威川以北の広範囲が浸水。

「市役所は 1 週間ほど水に浸ってました。茨木へ行くのに、千里丘のガードが通れないので、吹田のガードまで行かありませんでした。」《鳥飼下》

(山田川、大正川等は、切れやすい川だった)

「山田川は、タバコ 1 本吸うてる間に、こんだけ(手を縦に広げる)水かさが増えるといわれました。今と比べたら川幅がぐっと狭かったからや。」《庄屋》

「大正川の防領の所なんて、3 年に 1 回ほども切れました。山田川が切れたのは、昭和 14、5 年の頃、味舌天神さんのそばの堤防です。鶴野は堤防が切れそうになると、太鼓を叩きました。うち(味舌下村)は明教寺の鐘をゴーンゴーンと鳴らす。すると村は総出になります。竹やセンダンの木を切って堤防を補強したり、宮さんの土を取って運んだりします。女の方は米を寄せて炊き出しにかかります。切れたのは 1 回でも、鐘が鳴って総出になったのは何度もあります。小さい頃、洪水の遊びをよくしましたが、その遊びを「ゴンゴン」といいました。鐘の音です。」《味舌下》

《村の組織と機能》

(八町での聞き取りから)

ジグ(地下)

・明治 22 年に新村が編成されるまでの「旧村」、その後は「大字」現在は「自治会」。

カイチ(垣内)

・現在の「組」「隣組」昔の「小字(コアザ)」八町は上かいち、中かいち、下かいちと 3 つに分かれていた。戦争に入って、4 つの隣組に再編成された。隣組の組長はない。回覧板を回す単位。

同行頭(ドウギョウカシラ)

・カイチ単位に存在した。どこのカイチからも村の役員が何人か出ている。その中のしっかりした人に同行頭になってもらうように、役員会で決めた。この人が葬式なんかの時に責任者になった。

青年団

・ジグ単位。今はなくなった。高等小学校を出たら青年団に入った。それから 20 歳の徴兵検査まで所属した。戦前の青年団は、安威川の堤防が切れそうだななどという時、率先して働いた。主人が兵隊に取られた家の稲刈りに手伝いにいくなど慰問活動もした。祭でもねり込みをするなど活躍した。芝居もやった。自治会の会場によく集まった。(戦後は「青年会」となり、男も女もいっしょの構成員になった。)

処女会

・青年団の女性版。結婚するまでの女性が入る。青年団と同様に慰問活動をしたり、堤防が決壊しそうな時、炊き出しなどをして男の働きを支えた。戦後は青年団と合同して青年会となった。

愛国婦人会

・戦時中に処女会も含んで愛国婦人会になった。14、5 から 40 半ばぐらいの人で組織された。

在郷軍人会

・軍隊から帰ってくると入る。軍隊に行っていない人も入った。だから 22、3 歳から 30 過ぎの人になる。これは村の中核として「バリツカシテ(威勢よくふるまって)」いた。

翼賛壮年団

・戦時中の組織。インテリや小インテリを中心に八町でも数名いた。その頃はナラシた。

消防団

・現在もある組織。これは、戦時中の「警防団」の組織を引き継いでいる。年齢は決まっていないが、摂津市では 12 名と決まっているので、誰かがやめないと入れない。そんなことから結果として八町では 40 歳前後の人が多い。

水防団

・現在もある組織。消防団を過ぎた人が入る。村で実力を持っているのは水防団。

自治会

・現在もある組織。役員 10 人。重要事項は「総会」で決める。

カブ(株)

・以前に、その家の反別(タンベツ)や経済状況によって、村の負担の割り当てをした。その時その家ごとに「カブ」を決め、それに応じた負担を決めた。それを「株割り」という。

《「聞き取り」で得られた摂津市域の方言》

《「大阪ことば事典」に載っている大阪弁であるが、現在ではあまり使われなくなったもの》

アンニヤン	兄さん
オボル	埋める
コーバイキツイ	悪知恵が働く
ジビタ	地面、ジベタ
スモン	相撲
ドボ貝、ドブ貝	泥貝、からす貝
バリツカス	威勢よくふるまう
ヘベタイ	平たい、平べったい
ホト	そうすると
ミシロ	むしろ

《「大阪ことば事典」と少し異なっているもの》

イノウ	担ぐ(大阪弁は「イノウ」)
オトツタン	お父さん(大阪弁は「オトツツアン」)
オンジャン	おじいさん(大阪弁は「オジャン、オジン」)
クチナ	普通の蛇、青大将(大阪弁は「クチナワ」)
ゴット	ご馳走(大阪弁は「ゴツツオ」)
ジョリ	ぞうり(大阪弁は「ジョーリ」)
ショムナイ	つまらない(大阪弁は「ショウモナイ、ショウムナイ」)
セエライ	せっせと(大阪弁は「セエダイ」)
タンノする	飽きる、いやになる(大阪弁は『満足』に意が中心だが摂津では『不満』の意が中心)
ドーザエモン	土左衛門、水死人(大阪弁は「ドザイモン」)
ノッペ	きざんで煮た野菜などのあんかけ(「大阪ことば辞典」では「ノッペエ」で、あんかけうどんやのっぺえ汁のこと)

《「大阪ことば辞典」に載ってないもの》

アンコ	竹で編んだもんどり
イシダマ(八町)	びー玉
イッコッスラン	行きやがらない (「キヨッスラン」来やがらない)
イッシュク	いつでも
イツツコ(鳥飼中)	おじゃみ
イヌハシリ	堤防が川の水面と接するあたりの細い通路。 辞典によると「犬走り」は築地や垣根の外側と溝の間の狭い空間を犬が通う道に見立てて呼ぶもの。淀川の場合は、舟を曳く人の踏み跡が付くので、それを呼んだものと思われる。
イネコ	(行事としての)いのこ、猪の子
イマガタ	近年、今
ウゲ	竹で編んだもんどり
ウマヤ	(通常牛がいる)
オコンメ(中内、八町)	おじゃみ(「大阪ことば事典」に『主として京都での称』とある)
ガサ	川砂を上げる仕事

カタンコ、カタマメ
カワスツパ・カスツパ(八町)
ケーアイドリ
コシコク(越石)

コロ
コンダラ
サイメ
ジュウハチマメ(鳥飼中)

ジャックアイ
ソンジョサン
ドタ
ドテニワ
ドロ芋、ツチ芋
(縄を)ヌウ
野送り
ノマ
ハメ
ヒノツリ
ハケ
ハジキ(鳥飼中)
マッカク
マブカラス
マンデ
メンコ
ヤマイキ(山行き)

ヨーネンコ
ヨバレシニ行ク

干した空豆の煎ったもの
川原や中州の広がっている場所(川州原?)
シャモの闘鶏(蹴り合い鶏か?)
他村に対する排水路による漬れ地の補償。また、道路拡張によ村からの補償の意味にも使われる(「広辞苑」では「江戸時代、る知行割の際、一村または数村で、所定の高に不足のある時、隣村から不足分を分けて渡すこと。隣村の側からいう称。越石の地に住む百姓を越石百姓という」とある)
びー玉
今度、近々
土地の境界、境目
十六ささげ(「日本国語大辞典」では関西方言となっているが、「大阪ことば事典」には登場しない)
塞き止めた川の水を掻い出して魚を取る漁法
ご先祖さん
泥田
堤防の中段?
小芋
なう
野辺送り
田や畑の広がった場所、平野
まむし
昼寝
せいろ
おはじき
真四角
まるめる
まるで
おはじき
辞典類では「山遊び」または「山磯遊び」となっている。じねんじ山への遊山行事だけでなく、川や堤防への遊山もヤマイキという。
夜更かし、徹夜
ご馳走に招待される、お呼ばれに行く

《伝えておきたい印象的な話》

(乙辻)地下水が噴き出す場所があった

- ・千里丘陵の末端なので、地面から水が噴き出している所が何カ所があった。それを「元井戸」にして、竹の節を抜いたパイプを地下に這わせて、今の水道のように各家に水を配った。田んぼの水としても利用した。
- ・田んぼに井戸を掘って、はねつるべで汲み上げて用水にした。後には、日照りの時はポンプを使って昼夜兼行で井戸の水を揚げた。
- ・山田村の八丁池の水が余っていると聞いて、うちの村のお宮さんのお神輿と交換してもらったと聞いている。

(市場)市場池は大きな大事な池だった

- ・昔の市場は、今よりずっと大きく3町6反もあった。自動車のような形をしていた。タイヤに乗って、菱の実を採った。魚も獲った。
- ・昭和22年は大きな日焼け(日照り)で、市場池の水が干上がった。今の森川市長のところに井戸を掘ってもらって、地下水を必死に汲み上げた。
- ・水が足りないので、給水する田と給水しない田をつくることになった。ところが水を止められる田の人たちが、手に手に鍬を持って、巡査を連れて抗議にきた。

(鶴野)茨木から蒲団や家具が流れてきた

- ・今から65、6年前に、茨木川が沢良木のところで切れた。上から流れてきた水はこの辺に溜まってしまふ。茨木の豪農の家の絹蒲団や家具がこの辺まで流れてきて、舟で拾い集めてあげて喜ばれた。
- ・水が溜まるとどうにもならないので、大阪府の土手を切って排水することになる。いかんことやが、しょうがなかった。

(味舌)味舌のムシロは有名だった

- ・味舌はムシロ生産の中心地だった。近くの村で作られたムシロも味舌に集められた。品質が良く、大阪のムシロの値段は味舌のムシロで決まるといわれていた。
- ・主として冬の農閑期の仕事だった。どこも朝早くからムシロを打った。

「味舌小学校で、ムシロ打ちの腕を競う大会がありました。」《味舌下》

(味生)公会堂は自慢の建物だった 神崎川や淀川で泳いだ

- ・大正15年に建てた公会堂(一津屋の92所帯が、合計27,660円を拠出した。現在の第6集会所)はヒノキやケヤキをふんだんに使った立派な洋風建築で、村の自慢だった。
- ・村の寄り合い、村芝居、青年会の弁論大会、学校の学芸会など何かというと公会堂を使った。

「村の一番大きな寄り合いは年貢を決めること、つまり地主と小作の取り分を決める会でした。」

それぞれが代表者を立てて、労働組合の交渉のようなことをやりました。」

「4年生以上になると、神崎川の江口橋上流へ学校から水泳訓練に連れていかれました。紐の付いた帽子にフンドシを入れて行きました。淀川は流れが速いので泳ぐことは学校から禁止されていたが、見つからないようにしてよく泳ぎました。向こう岸まで渡ると、はるか下流に流されていました。」

(味舌下)雨乞いをした

・大正の頃も昭和に入ってから、安威川が干上かってしまうようなひどい日焼け(水不足)か何度もあり、その度に雨乞いをした。

「ハガミさんというて、もともと浜の宮さんだったのを、天満宮に合したのが今でもあります。石がご神体です。そのハガミさんを出してきて、たらいの水に浸けて、白い布に包んで、わっしょいわっしょい担いで歩くんです。毎晩毎晩。白い足袋履いて「てんと(天道の意?)のおかげに、百年、米一斗五升」と言いながら、周りを3回回り歩くんです。のおじいちゃんが太鼓叩いて。雨が3つぼか4つぼでも降ったら、『やつぱりせんとあかんもんやなあ』と言いつつ合ったものです。」

(鳥飼野々)よそとは違う行事が色々ある

「浄土真宗でなく浄土宗だからということになりますが、暮にはシメナワ作りにかかります。シメナワを飾るのは、井戸、かまど、仏壇、以前ならカラスキや舟などです。」

「1月15日のトンドは、よその村と違って各家ごとにします。どこの家もシメナワが多かったからだろうと思います。家のカドで焚きます。」

「昔から愛宕さんの講があって、1月15日にはお祭りをします。講番(講の当番)は5月に京都の愛宕さんへ代参に行って、講の人数だけお札とシキビをもらってくるのです。」

「お盆の行事は大事にしています。まず11日が施餓鬼(セガキ)お寺に戒名(カイミョウ)を書き出してもらって、ご先祖さんをお迎えします。お水の中へ朝顔を一つ入れて、線香を添えてお迎えに行くのです。13日からお祭りになります。ハスの葉っぱにホオズキやナンバやマツカなどを乗せてお供えします。15日になると真福寺さんが各家を拝みに回らします。15日はご先祖さんを送ります。祭っていた戒名とお供えものを全部川に流します。この頃は川に流すとおこられるので、各家で焼きます。」

「地藏盆のとき、昔は太鼓を叩いて念仏を唱えて踊る六斎(ロクサイ)という踊りをやったそうです。」

「春秋の彼岸にも、戒名を書き出してもらって、ご先祖のお祭りをします。」

「浄土真宗の報恩講にあたるのが十夜(ジウヤ)です。この時も戒名を書き出してもらいます。」

「お葬式の行列の先頭は、子どもが持つ提灯と旗です。提灯は六角で2本。旗は6本、三角の木の枠から紙を貼って、凡字を書いて、横をびらびらに切る。1メートル50ぐらいです。」

《郷土のはなし》

(年寄りの聞き伝え、ふしぎな話、おもしろい話など)

鳥飼上「サムライの話三つ」

(鳥飼中の林学氏が子どものころ、住んでいた鳥飼上で80歳くらいのおじいさんから聞いた話)

『五久の船着き場でサムライが刀を抜いた』

昔の五久の船着き場は、渡し船だけでなく、上り下りの舟も停った。旅館や料理屋もあり賑わった。あるとき舟を待っている何人かの中にサムライも一人いた。舟が着いたので、棧橋に座っていたサムライが立ち上がって舟に乗ろうとした。ところが隣に座っていた百姓が、袴の裾を踏んでいたものだから、よろよろとよろけてこけそうになった。周りの人たちは思わずすすすと笑った。

ところがそれで大変なことになった。笑われたサムライは、烈火のごとく怒って刀を抜いた。びっくりした周りの人たちは必死になってなだめたりあやまったりした。袴を踏んでいた百姓は、真っ青になって平あやまりにあやまった。

サムライはなかなか許そうとしなかったが、なにしろ狭い船中のことなので、それ以上どうにもできないで、刀を収めた。

一時はどうなることかと本当にはらはらしたと、そこに居合わせた人たちは後々までその話を繰り返した。

『サムライが槍で米俵を跳ね上げた』

昔、鳥飼は高槻藩の領地だった。ある年、例年のように、高槻城のサムライが年貢を取りに鳥飼上の村へやってきた。その時すでに年貢米はどんどん運び込まれており、米の入った俵が積み上げられていた。サムライはその中の一つの俵に腰をかけて、作業を見守った。

ところが百姓たちは怒った。自分たちが汗水たらして作った宝のような米の俵に腰をかけるなんてとんでもないというわけだ。そこで腰をかけているサムライにその旨を告げた。

ところがサムライは何を思ったか、腰を上げると傍らの槍を取って、いきなり米の入った俵をブスリと突き刺し、はずみを付けて上に跳ね上げた。見ていた百姓たちはびっくりした。なぜなら、一俵の米俵は、大の大人がようやく担ぎ上げられる重いものだったからだ。

いくら武術の鍛練をしているとはいえ、これにはど肝を抜かれて、何も言えなくなってしまった。

『逃げてきたサムライをかくまったこと』

鳥飼上のある家で、ある晩夜通しのバクチをしていた。その家の親父さんはたいそうバクチ好きで、しょっちゅう人を集めてバクチをしていた。

そこへサムライが入ってきて追われているからかくまってほしいと言った。京都の方から堤防沿いに逃げてきたが、この家だけ明かりが点いていて、人が起きていると思ったからだという。そこで納屋にしばらくの間そのサムライをかくまってやった。

明治維新の前後は、京都やその付近で、鳥羽伏見の戦いや蛤御門の変や近藤勇の切り込みなど、サムライたちのごたごたが絶えなかった。京大阪間の淀川堤防は、サムライたちが気ぜわしそうに行き来していた。勝海舟が通ったのを見たと言う人もある。そんな様子だったから、若い女の人は堤防へ行ってはいけないといわれていた。

狐の話

鳥飼中『狐ガが女になってました』

鳥飼の五久から茨木へ続く府街道(茨木街道)を行くと、宮鳥橋ができる前は安威川に太郎橋という石の橋がかかっていた。その少し手前、今の下水のポンプ場のあたり(現在は鳥飼本町二丁目)に池があって、街道のその辺を通る人は、女に化けた狐によくだまされたものだそうだ。

鳥飼上『狐にお菓子を取られた』

この村のある人が、枚方までお菓子などいろいろな物を買出しに行って、村の人に売り歩く商売をしていた。鳥飼上の村と高槻の柱本の村の間はヨウガイショと呼ばれて、背丈を越す草の生い茂った寂しい場所だった。この人は行き帰りにここを通る。帰りはリヤカーに荷物をいっぱい積んで草をかき分けながら通る。ところがそんなとき、ばさばさと音がして、草を通り抜けてみると、お菓子の袋が破られて取られており、荷物は狐や狸の足跡だらけだったということだ。

竹の鼻『狐の嫁入りを見た』

小さい頃、東の堤防(千里丘東?の、山田川?の)に「狐の嫁入り」が通っているのを見た。晩に堤防の行列のようなものが並ぶ。

竹の鼻『狐にオアゲを取られた』

さんのおじいさんは何度も狐にだまされている。いつもナカミヤの宮さんのところだ。ある時、肥汲みに行くので、夜の3時頃馬力に乗って家を出た。前に堤灯をぶら下げて。そしていつもだまされる場所が近づいてきた。今日こそは絶対にだまされない、出てきたら殺してやると考えていたおじいさんは、狐をおびき寄せるための油揚げと殴るための棒をもって身構えていた。

そこには夜泣きうどんの屋台が出ていて、「大将、うどん食べてくれ」と声をかけてきた。そのまま行き過ぎてはっと気がつくと、自分の持っていた油揚げが無くなっていた。うどん屋に化けた狐にやられたのだ。

帰りにそこを通りかかると、うどんが落ちていたということだ。狐がうどんを落とすなど変な話だが本人から聞いた話だ。

竹の鼻『狐にロウソクを取られた』

これは自分が経験したことだ。馬力に乗って肥汲みに行く途中吹田でのことだ。天道からむこう、踏切を越えて、朝日町を曲がったところに来た時だ。前に付けていた提灯のロウソクが急にぼうっと明るくなって消えた。おかしいと思って提灯をのぞいたら、ロウソクが無くなっていた。そんなに早く無くなるはずがない。吹田警察が近づいたから、さっき付けたところだった。馬力は提灯を付けて歩かなければならない決まりになっていたから。狐に取られたとしか考えられない。

狸の話

鳥飼中『マメダに麦を取られた』

うちのお祖父さんが夜遊びをして戻ってきたら、うちの家のそばの長音寺の石塔のところにマメダ狸がおって、そいつが牛にやろうと思っていた麦を全部食べてしまったという話を聞いた。

鳥飼中『狸が砂をかける』

長音寺のそばに、昔大きな榆(これ)の木があって、その上にときどき狸がおって砂をかけるといわれていた。

竹の鼻『狸か狐に砂をかけられた』

千里丘の　　の墓で、よく砂をかけられた。狸か狐か知らんけど。

市場『狸が砂をかけるといわれた』

今は市場池のそばにある地蔵さんは、もともと　　さんの屋敷にあって、地蔵盆はそこでした。その屋敷に大きな棕(むく)の木があって、狸が上から砂をかけるといわれていた。

庄屋『大きな音をさしよる』

子どもの頃、家の前の木の下を夜中に通ると、狸か狐がばらばらと落としよるとか、大きな音をさしよるとか聞いた。

野々『安康の堤防で、よく狐や狸に化かされるといわれた』

茨木へ買物に行った帰りに、安威川の安康(アンコウ)の堤防で、よく狐や狸に化かされるといわれた。酒を飲んだ帰りに焼き餅なんかを下げて歩くと、狸なんかがついてくるので、やらないと道が分からなくなるといわれた。

ある人が帰る時、夜中なのに若い女が立っている。道をよけようとしな。気持ちが悪い。よく見ると、狸が息を吹き出していた。その人は酒を飲んでいなかったの、それが見えた。

蛇の話

野々「白蛇を祀った蛇塚がある」

松下の酒屋の南側に蛇塚というのがある。これは白蛇が祀ってある。ある人が夏に田のへの草刈りをしていると、見たこともないものすごく大きな蛇がいた。その田の地主は大阪の伏見町の人で、蛇のことが気にかかるので、琵琶湖の竹生島まで見てもらいに行った。すると、淀川の洪水の時よその地から流されてきて、切れ所から入って蓮池に棲むようになったのだろう、お祀りするほうがいいということだった。そこでお祀りした。今でも毎月15日には卵を供え続けている。

野々「番田の井路には大蛇がいた」

番田の井路の辺は人があまり寄りつかなかった。あの辺では、蛇が逃げる鴨を追いかけているのを見たとか、魚を釣ったカゴを丸太の上に置いたら丸太が動き出したのでびっくりして逃げたとか、そんな話がいくつもある。

鳥飼中「ミー(巳)さんが祀られた」

体の弱い子どもをもったある人が子どもに鯉を食べさせてやろうと、今もある近くの池でジャコ取りをしていた。ところが置いていたドマル(魚の入れ物)の上に小さいクチナ(蛇)かちよこんと乗っていた。シッシッと追おうとすると、クチナが太くなって大きな口を開けた。その中は真っ赤だった。びっくりしてミーさんかも知れんということで拝んでもらったら、やっぱりミーさんだという。だいいちその時は2月の寒の最中で、蛇がいるはずかない。

そこで組で祀ることにした。しばらくして、他の人が先に拝んでもらった人と違う人に見てもらったところが、その人もミーさんだという。その家のお使いさんで、その家の人を使っていた人だという。大事にせんといかんという。

大事に祭って、毎年寒の日にお祭りをした。ところがある年のお祭りの当日、その人家の石垣からちよろちよろっと顔を出した。そんなことがあって、いっそう大事に祭るようになった。

戦後になると、祭るのは年寄りだけになった。子どもはお飾りを粗末にして投げ捨てるなど、世の中はどんどん変わっていった。それでも年寄りは頑張っていたが、最後には拝んでもらって、ホコラは返してしまった。

鳥飼下「シラナガ大明神とクロタン」

学校へ上がった頃、私ひとりだけがえらい熱が出た。お稲荷さんが降りて乗り移る人に見てもらいに行った。すると前に巳(ミー)さん、後に狸(クロタン)と二人ついてきたはるとのことやった。巳さんはシラナガ大明神というて、同じ大明神仲間でも稲荷さんはえらそうに言わはらへん。ところがクロタンにはぼろくそに言わはる。(ここから巳さんやクロタンにいろいろと聞く話が続く。)

《郷土を守り発展させる》

神安土地改良区

- ・明治 18 年、「水利土工会」として発足以来、「神安普通水利組合」を経て現在に至るまで、地域の水利全般を司る重要な組織として機能し続けている。
- ・「利水」「排水」とも農業の死命を制する重要問題であるが、近隣地域と利害が相反することが多く、常に難問となる。特に摂津市域およびその周辺は低湿地が多く、排水をめぐる問題で悩まされてきた。この難問を、広範囲の村々が協力して解決に導いた成果がこの組織であり、いち早い成功例として全国的にも注目されたという。
- ・現在では三島平野の大部分を工リヤとする大きな組織に発展している。

河川改修

- ・市域のすべての河川について、ずいぶん昔から繰り返し行なわれた。
- ・現在われわれが見る河川の姿は「堤防のかさ上げ」「流格の付け替え」「低水化工事」「川幅広げ」など、何度も改修を重ねてきた結果としての姿である。

水路(井路イジ)と樋門

- ・農業用水生活用水の獲得と悪水(余った水)の排出のために作られた。
- ・水運にも利用された。
- ・低湿地では、悪水の排出が主要な目的。他の村に悪水を流す場合、田を水路に変える保障として、年々米または金が支払われた(越石、コシコク)。後年その権利義務の関係が非常に複雑なものになっていった。これが「神安土地改良区」の成立につながる原因となった。
- ・「実正(ジッショウ又はサネマサ)樋」(鳥飼上)は、十六世紀の文書に登場し、日本最古の樋門といわれる。
- ・「伏越(フセコシ)樋門」は、別府村まで流れてきた井路を、安威川の下をくぐらせて、吹田の古志部(キシベ)村まで延長して神崎川に落とすための樋門。1651 年に作られ、高度な技術を駆使した。

囲み堤

- ・淀川流域の各集落では、集落の境に「縄手、ナワテ」という道路を兼ねた小堤防を作って、輪中を形成していた。
- ・豊臣秀吉は、淀川の堤防と道路を兼ねた「慶長堤」(輪道、ワンド)を作った。その一部は鳥飼上と鳥飼和道に残っている。

段倉と土盛り

- ・段倉は淀川などの水害から米や生活用品を守るため、石積の上に立てた倉。

- ・寺の多くは、土盛りした小高い場所に建て、洪水時の避難場所ともなった。
- ・低湿地を畑にする場合、畝(ウネ)の間を深く掘り、その土で畝を高くしたり、深い池を掘り(ウチイケと呼ぶ)、その土で地上げをしたりした。
- ・カネカや薫英学園は、敷地内に池を掘り、その土を盛り上げた部分に建物を建てた。
- ・稲作でも、低湿地ではウネを作って、水面より高い部分を作りだし、そこに稲を植えたところもある。

ため池と農業用井戸

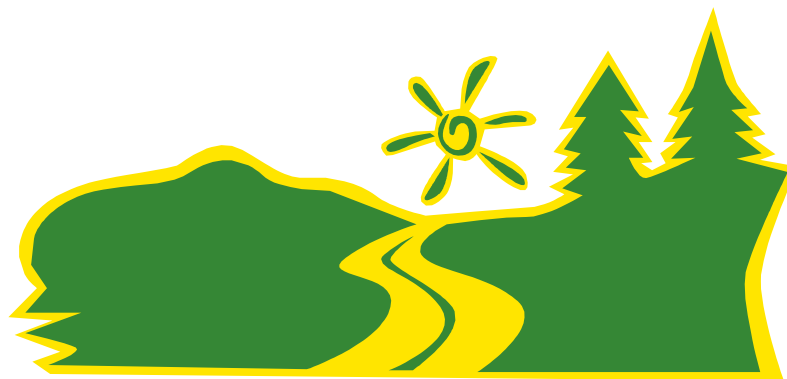
- ・市域の北部では、農業用水確保のため、いくつもの「ため池」や農業用井戸が掘られたが、現在は市場池の一部以外は埋め立てられた。

耕地整理

- ・耕地整理は農道や用排水路の直線化を軸に、田畑の形体と所有関係を整理し、農作業の効率化、近代化によって収量を高めようとしたもの。
- ・明治32年に耕地整理法が制定され、地主たちが耕地整理組合を作って、明治末から大正期に全国で盛んに実施。市域では一津屋が最も早く大規模に行なった。

道路と交通の整備

- ・新京阪(阪急、昭和3年称正雀駅開業)、産業道路(大阪高槻京都線、昭和11年開通)、国鉄(JR、昭和13年千里丘駅開業)により、市域の中心が北部に移る。
- ・昭和2年、バス路線運行(長柄橋より淀川堤防上 茨木駅から鳥飼五久)。
- ・昭和3年正雀駅開設、昭和13年千里丘駅開設(周辺の宅地化、店舗等)。
- ・昭和22年鳥飼大橋完成。
- ・昭和26年正雀 大阪金属前バス路線。昭和28年茨木 鳥飼 鳥飼大橋 正雀バス路線開通。
- ・昭和41年大阪 高槻線および中央環状線開通。



《聞き取りを終えて》

熱心にご協力いただいた大勢の皆さんに、心から感謝申し上げます。

ずいぶん昔のことなのに、細部までよく記憶しておられることに驚きました。特に、昔なじみの方と話し合っておられるうちに、記憶がどんどん蘇ってくる様子でした。村史や市史といった「公式記録の歴史」ではほとんど記録に残されることのない、具体的な日々の暮らしの姿を聞き取り記録しておくことは、歴史的記録としても高い価値を持つと思いました。

現在すでに、聞き取り可能な方の「昔の記憶」の中心が、戦前より戦中や戦後に移りつつあると感じました。それだけに、今聞き取っておかないと、昔の様子はいつそうわからなくなると思いました。

できるだけナマの語りの雰囲気再現させたいと努力しましたが、結局「要点のみ」に近くなり残念です。

なお、この報告からは、どうしても記録に残しにくい「裏話」的なもの、比較的近年のこと、個人的なこと、他と重なっていたりして整理しにくいことなどは割愛させていただきました。

(教育委員会生涯学習課「昔の暮らし聞き取り担当者」)

表紙の絵は「続浪花風俗図絵」(杉本書店)より

摂津市域 昔の暮らし

《聞き取りのまとめ》

平成10年3月初版

編集・発行

摂津市教育委員会 生涯学習部 生涯学習課

〒566-8555 摂津市三島一丁目1番1号

電話 06(383)1111 072(638)0007